
Eternal wish **序章：始まりのようで、終わりのようで**

シン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E t e r n a l w i s h 序章：始まりのようで、終わりのよう
うで

【Nコード】

N 3 4 4 5 T

【作者名】

シン

【あらすじ】

F C ブログ、m i x i と重複

あらすじ

A D 高校は生徒全員が能力者。 が、そこに通う主人公、立花 遊
は異例の無能力者。 そんな彼があることを境に、能力者となる
のだが、その能力とは・・・。

白石先生とお勉強

白石 「こんにちは、皆さん。 AD高校の教師、白石です）
^o^）。

今日は、皆さんと私の登場する小説、E t e r n a l W i s h の世界観についてのお勉強をしたいと思います。

……ふふっ、それにしても、作者さん、出番の少ない私にこんなチヤンスをくれるなんて……感動です!!」

作者 「……ただ、出来によって、他のキャラクターに進行役を。」

白石 「うわー!! 私、頑張りますよー!! さて、それじゃ、早速、本題にいきましょうか。

この世界は、皆さんが住む、リアルの世界とまるで変わりません。

ただし、あることを除いては、ですがね。

この世界には、悪魔、天使、人間が存在し、それぞれ、暗黒騎士、聖騎士、中立に分かれています。

この3勢力によって分けられた世界は、100年前、停戦協定を結び、終戦を迎えているんです。

ですが、そのことを知らない中立側は、悪魔、天使は滅び、人間の住む世界になっていると、天使に騙されていたんです。

これが歴史についてですね。 これ以上はまだ、話せませんが、いずれわかるはずですよ。 ……えっ？ おまえも中立側でしょ

って？ ……まあ、このコーナーは本編とは関係ないので、何でもありません。

まあ、次にいきましようか。　ちがう、たとえばやはり、中立の政治でしょうね。

皆さんの住む日本では、トップは総理大臣だと思います。ですが、この世界では、指導者、が存在します。

指導者の言葉は絶対であり、これに反するものは、国家反逆罪の罪に問われます。

さらに重要なのは、国民は、指導者を知りません。

つまり、これは個人情報を漏らすことを防ぎ、暗殺させないようにしているのかと。　まあ、近い人間は、指導者を知っているようですが。

……以上が世界観となっておりますかね。　詳しくは、本編を見てください。

こちらのコーナーでは、キャラへの質問や、小説についての質問、何でも受け付けておりますので、何かありましたら、作者様の方までメッセージを御送りください。

今回は、キャラ紹介のコーナーです。

……こんなものでよろしいでしょうか？

シン　「……世界観が物足りないが、まあ、上出来ですかね。」

白石　「やったー!!!」

シン　「ただ、次回の司会は、白石先生かどうかはわからんけどなww」

白石 「……(TOT) /」

シン 「それでは、皆さん、次回もよろしくお願いいたします。」

1話

そこは、愛する二人の願いを叶えてくれる、夢のような場所……という都市伝説がある。そのため、カップルが多く集まる場所となっている。たとえ、都市伝説の噂が潰えようと、きつとここに人が来なくなることはないだろう、特に夜は。永遠と続く黒い空を彩るは無数の星々、それら全てを受け入れ、もう一つの世界を映し出す海。そしてなにより、世界で存在しているのは二人だけであるかのように感じさせる広い浜辺。

ある夜、とある少女とある少年がそこにいた

「くん。もし、私　たら、　れる？」

「。。」

ジリリリリリリ。

「……ん？」

どうやら夢を見ていたようだ。

ちょうどカーテンの間から、光が差し込んでいる。

目覚ましをとめ、見てみると目覚ましは8時をさしていた。

「学校か……だるいな。」

少年の名は立花^{たちばな}遊^{ゆう}、十六歳。髪はだいぶ整っているがボサボサ、顔はイケメン顔負けの二枚目、身長は大体170位で、少々めんどくさがり屋だ。

A D 高校に通う高校二年、正しくは今日から二年だ。

「一限は始業式か……二限から登校しよう。」

カーテンを開け、用意を始めた。

「行くか。」

時間は九時、一限目と二限目の間を狙った、ちょうどいい時間に出掛けた。

30分ぐらいのろのろと歩き、ちょうど校門に差し掛かろうとしたところだろうか。

校門の前あたりに一人の男が立っていた。

「よお。遊。やっぱ二限から来たな。」

こいつは天草あまくさ 陽介やうすけ。俺の数少ないクラスメイトだ。ストレートパーマで茶髪、顔も二枚目といえるのだが、女の子好きの性格（二次元も可）のため、あまりモテない。

とある事情で、俺に話し掛けて来る奴は少ないのだが、こいつは気にしていないようだ。

「……お前もさぼりか？陽介。」

「多分、お前なら遅れて来るとおもってな。」

どうやら俺が来るのをまっていたようだ。

「んじゃ、いこうぜ。さっき、ほかのやつにクラスを聞いた。俺も遊も三組だ。」

俺は、はあっ、とため息をつく。

……どうやら今年も一緒らしい。めんどくさいが、退屈せずに見そうだ。

「俺もだぜ、遊。 お前と一緒によかったと思っている!！」

「人の心を読むな!! エスパーか!? お前は!! 気持ち悪いんだよ!！」

「たあっはっはっは。 もう一年も一緒なんだぜ? 心も読めるようにもなるぞ」

(そんなことできるようになるのは、絶対お前だけだ。)

「まあな。 それとよ、もうひとつ、重大発表があるんだよ。」

(また読まれたが……まあ、いいか)

「なんだよ」

「それがな……不知火さんも一緒なんだよ」

「最悪じゃねえか!！」

「何言っつてやがる。 不知火さんといえば、学校で1、2を競う」

美女だぞ？」

「……まさかとは思うが、不知火もいける口か？」

「どストライク」

(まじかよ、もうこいつ、女って性別だったらなんでもいけそうだな。下手したら、70代のばあちゃんでも、いけるとか言いそ
うだな。)

「いけるぜ」

「いけんのかよ！？ てか、いい加減人の心読むのやめろ！ 気持ち悪いから！」

「たあつはっはっは。そう怒るなって、遊。 お前ことも忘れてないからよ」

「先行くぞ」

「だあゝ。 まってくれゝ。 ごめん、冗談だから。 だから、俺を見捨てないでくれ、遊。 寂しくて死んじゃう」

「ハムスターか、てめえは。 抱きつくんじゃねえ！？」

……しかし、不幸だ また、何かと絡んでくるに違いない。
おれは溜息をつき、教室へと向かった。

学校だが、別に、他の普通の高校と何ら変わりはない。 内装も外装もコンクリートできているし、広さだってそこまで広くはな

い。

……そして二人は教室に着いた。ドアを開けると小さい少女が教壇に立っている。

「立花君、天草君。初日から遅刻とはいい度胸です。」

この人は白石^{しらいし}江里^{えり}。身長が百四十？しかないが、ちゃんとした先生だ。皆からは江里ちゃんと呼ばれている（小さくて可愛らしいため）。俺は白石先生と呼ぶが。

「おはよ。江里ちゃん。今日も可愛いね。」

今日もナンパ気味の陽介を無視し、HRを進める白石先生。

これくらいはいつものやり取りだ。クラスの連中も陽介のこととは、把握しているため、あまり驚いていない。男子は笑っており、女子は若干、引いている。

「早く席についてください。君達は一番後ろの席。不知火さんの隣が立花君ね。」

……今なんと言った？俺は思わず驚いてしまった。

俺と不知火が犬猿の仲と知って隣にすることは……いや、白石先生のことだ。隣にすることで仲が良くなるでも考えたのだろうか。

2話(前書き)

高校二年となった主人公、立花 遊。

だが、初日からめんどくさいことばかりが続く。
特に、一番めんどくさいといったら……。

2話

……どこまで子供っぽいんだ！？この人は。
……それから席につくと、予想通り奴が絡んできた。

「初日から遅刻とはね。なんか怪しいわね。」

今、話かけて来ている女子が不知火京子である。
長いポニーテールで、陽介と同じ茶髪。容姿もスタイルも程よいと、クラスでは人気。ただ、思ったことをかなり、ズバツ、というので、性格は怖い、ともいわれている。

彼女とは去年、同じクラスではなかったのに俺に何かと突っ掛かってきた。廊下ですれ違った際には、「授業中いつもねているそうじゃない。何故赤点をとらないの？」とか。下校時には俺を付け回し、「下駄箱になにか仕込む気でしょ？」とか。

挙げ句のほてには「無能力者なのに何故、ここにいるの？」と、俺の存在理由も否定されてしまった。

前に一度だけ、何故俺に突っ掛かってくるのか、ときいたときに不知火は「立花をみていると嫌な予感がする。」「らしい。……迷惑極まりない。大体、そんなことをして、俺に何の得があるんだ？

爆弾魔か？俺は。

少し、この学校について説明しておきましょうか。

ここは一見、普通の高校。

東京のとある田舎に建っている、どこにでもありそうな高校。

だが、問題はここから。

生徒や教師が必ず、何かしらの能力を持ち合わせているということだ。

いや、教師だけではない。この町、つまり、この高校を中心とした半径5キロメートルの内側に住む人たちは、皆、何らかの能力者なのだ。

例えば、いきなり手から火を出したり、何も無い空間から銃や刀を取り出したり、なんともファンタジックな町なのである。

……無論、普通の一般人（町の外に住む日本人）はそんな非科学的で、危なっかしいものが使えるはずもない。

能力は使えないものの、能力についての知識、歴史については知っているため、決して無知というわけではない。

ただ、能力が使えるものなら、この町のどこかに強制搬送されることになるということだ。

しかし、能力者たちはそんな掟や、ここでの生活に不満があるわけではなく、むしろ感謝している者もいるくらいだ。

商店街だってあるし、娯楽だって少なくはない。

この町に関しては……またの機会に話すとしよう

何でそんな俺がこんなファンタジックな学校にいるのかと云うと、実は俺にもわからない。中学のとき、いきなり俺のところに「特待生として歓迎します」と一通の手紙が届いていた。

俺はエレベーター方式的な感じに高校にはいれるなんて、なんて幸せだと思いきや、現にいたる。大体、誰が俺なんかを特待にえらんだのやら。

とまあ、こんなかんじだ。当然授業には、能力実技もあり、毎回ゼ口点であることは……いうまでもない。

だからこそ、俺に話しかけてくる奴は少ない。友達も陽介くらい

だな。

話を戻そう。どうやら不知火に初日から遅れてきて疑われているよ
うだ。いつも通りなんだが。

「別に。始業式が怠かったただけだ。」

「本当かなあ？」

不知火は首をかしげる。

……これ以上話すと厄介だ。

「陽介、あとは任せた。」

俺は陽介に、頼んだサインを出し、顔を伏せる。

「……京子ちゃん、遊は朝の処理に時間がかかって遅くなったんだ
よ」

何言ってるんだ？こいつは。とりあえず黙らせるため、顔面にパン
チを一発いれ、陽介をDREAM worldへ送ってやった。

「ねえ、立花。」

「なんだよ。」

「朝の処理ってなに？」

……

「お前にはまだ早い。」

そういつて、俺は夢の世界へ旅だった。

「ねえ。朝の処理って？ まだこたえきいてないよお！！ 一体なんのことなのお〜？」

「ん？」

起きたら放課後になっていた。

今日は午後まで授業がなかったため、弁当がない＝買いに行かなくては、となる。

つまりデパートまですこし歩かなければならないということだ。

まあ体を動かすことや、街をぶらぶらすることにたいして、負の感情はないためいいのだが・・・

そして俺は、帰り支度を済ませ、教室を後にした。

……。

……どうやら不知火もあとをつけて来たようだが、気づかないフリをしておこう。

というか、電柱に隠れたり、壁に張り付いたりしている時点で、バレレである。 逆にこっちが恥ずかしくなってくる。

「……しかし、今日も退屈だ。」

街を歩いていると、歩道に差し掛かった。

「ん？」

向こうで子供が道路に出ようとしている。赤信号にも関わらず。だが、母親がしっかりと掴んでいるため、飛び出すことはできない。

どうやらぬいぐるみを歩道に落してしまったようだ。

「（まあ、子供の命にかえられるものはないな。）」

そう思った矢先、女の子が飛び出した。

「なにやってんだよ!？」

思わず、俺は声を荒げてしまった。

女の子はぬいぐるみを拾ったようだが、横から来る車には気づかない。

「ちっ」

考えるより、身体が動いていた。俺は音速位のスピードが出ているのではないかというくらい速いスピードで走っていた。

この少年は、なにをやらせても普通という評価を周りから受けていたが、それは彼が本気ではなかったから。

本気でやれば全てにおいてトップで在るはずだった。だが、少年は本気にはならない。二度とあんなことが起こらないためにも。

俺はぬいぐるみを拾った少女に飛び込み、何とか車からは守った。だが相当のスピードであったから衝撃は相当なものであると判断。更に少女側に飛び込んだため、このままでは少女がその衝撃を吸収してしまう。

俺は即座に身体を反転し、自分を下にした。

……よく聞く話で、死ぬ前はスローモーションになるとよくいうが、

まさにその通りであった。

そのコマおくりになっている間、少女の顔が目に入った。その刹那、鎖が切れるような、金属音が頭に響いた。

「……この子は!？」

知っている。俺はこの子を……知っている。

……そこで遊の意識はとんでしまった。

3話（前書き）

学校が終わり、商店街へと向かう遊。

車にひかれそうだった少女を助けたものの？

3話

「……ん？」

気がつけば、病院のベッドだった。

「気がついたようだね。」そこには一人の医者がたっていた。

「……」

状況がまるで理解できない。さっきまで街中を歩いていた気がするんだが？

今、俺は家へと帰宅中だ。

「（まだ、実感がこないな。）」一言で言えば記憶喪失らしい。どうやら女の子を助けて、頭を地面に強打したことが原因らしい。ただ、俺の記憶喪失は軽度のものらしい。記憶喪失には大きくわけて三つあり、一つはおもいでをすべてなくす。一つは知識とおもいで両方をなくす。そして俺の場合である衝撃を受けた前後の記憶と一番大切な記憶をなくすことである。

だから、俺は事件前後の記憶がない。でも、大切な記憶というのはわからない。あったのかさえも。何故、大切な記憶がなくなると

いうのかというところ、大切⇨常に忘れることはない+常にそのことを考えている。ということらしい(医学的に)。

例を挙げると、大切なものほど身近にあり、大切でないほど身近にない。身近にあればおもいだしやすいが、それと同時に傷つき易いということだ。

外殻⇨大切 内殻⇨大切でない とかんがえたとき、外からの衝撃を一番受けやすいのは外殻である。つまり大切なものほど思い出しやすいが、衝撃もつけやすいということだ。

しかし、さつきもいったが俺に大切な思い出があつたのかさえわからない。

ちなみに今日は事件から一日たった、午後6時である。

……

「(もういい。考えるだけ無駄だ。)」

無駄なことを考えているうちに、家についていた。

俺の家は、中々のアパートで、学校から借りた、いわば学生寮というやつだ。 学生寮は、二階建てで、そこまで大きくない。 とはいっても、すべての部屋がうまっているわけでもない。

むしろ空き部屋が多い。 なぜなら、自宅に住んだり、一人暮らしをしている学生の方が多いらしいからだそうだ。 …… まあ、いいけど。

俺の部屋、つまり205号室のドアを開けると信じられない光景を目の当たりにした。

「お帰りなさいませ。魔王様。」

「………すみません。家、まちがえました。」

……俺の家じゃないよな、うん。 他の家の人やペットでも飼ってらんだろ。

変な生物が宙に浮いているのを受け入れられるほど、俺の心はファンタジックじゃないんだ。

だが、ドアには「205」と書いてある。

「魔王様〜!! 部屋はここであってますよ〜!!」

小さい生物が俺を引き止めてきた。

「うそつけー!!。むしろ夢か？これは夢なのか？ だから記憶喪失だの魔王だの、訳のわからないことになってるのか？」

できればそうであってほしい。 もう、この世界は訳がわからない。

「残念ですが、現実なのです。記憶喪失も、ご主人様が魔王であることも。」

……今なんと言った？

ご主人様が魔王？

「一応聞いておくが、ご主人様ってのは」

「なにいつてるのですか？貴方しかいないじゃありませんか？」

目の前に浮かぶ小さな女の子？は清々しく笑っていた。

「俺が魔王？……冗談なら他を当たってくれ。」

「冗談じゃありませんよ。正統な王位継承者です。」

「……」

嘘をつくような性格にはみえない。

「わかった。とりあえず最初からわかりやすくおしえてくれ。」

「わかりました。」

とりあえず、部屋の中に入り、俺はベッドに腰を下ろし、その前に小さな女の子が飛んでいるという、何とも不思議な光景が広がる。

「とりあえず世界情勢を話しておきましょう。世界には三つの勢力が存在します。」

「天使と悪魔と人間か？しかしあれは百年くらい前の話だとならうたが？」

「やはり魔王様は勉強も出来るみたいですね。そうです。人間の間では。」

間では？

「戦争が終わったのは確かに百年前です。ですが、それから三つの勢力は平和条約を結び、いまにいたっているのです。」

「天使と悪魔は滅んだと聞いているんだが……それが正史か？」

「ええ。聖騎士と暗黒騎士の間ではそうなっています。」

「さつき、人間の間ではつと言ったな？　そして歴史が食い違っているとこのことは・・・どちらかが情報操作しているということか？」

「さすが魔王様です。その通りです。天使側が情報を操っています。何年も前から。人間の歴史全てを。」

4話（前書き）

目を覚ますと病院で寝ていた遊。

どうやら軽度の記憶喪失に陥ってしまったらしい。

そして家に帰ると、小さい悪魔の女の子がいたわけなのだが？

4話

「全て？」

なにを言ってるんだ？……いや、違うな。そんなこと出来るのか？

「ええ。まあ、そうですね。何か歴史の出来事を教えてくれませんか？」

「……極悪非道な暗黒騎士軍が聖騎士の本拠に攻め込んだが、聖騎士は神の力をかり、暗黒騎士を退けた……とかか？」

「ええ。それも偽情報ですね。元々攻めてきたのは聖騎士で、神の力なんてものは存在しません。」

……やはりか。押し付けがましい暗黒騎士側の意見だと思うが……

「情報操作しているのは、聖騎士側だと言つのは理解した。俺も神なんか信じたこと無かったしな。だが、一向に見えて来ない問題がある。そんなことをして、聖騎士側になんの得がある？」

そう。問題はそこだ。そんなことをしたところでなんの意味があるのか？

「魔王様は理解がよくて、助かります。うーん、そうですね、……魔王様はなんでだとおもいます？」

……情報操作の理由？

俺が聖騎士側なら……

「ちなみに私達から先に動いたことは一度だってありません。」

？ 何か関係があるのか？ 人間に偽情報を流す理由……。先に動かなければならなかった理由……。？ そういうことか。

「先に聞いて起きたいんだが、情報を流した時、戦力的には五分五分か、聖騎士側が不利であつたと推測しているんだが？」

「正解です。」

……やはりな。なら、一つしかない。

「偽情報を流したのは、人間を戦力にしたかつたから。自分達を正義のように見せておけば、自然と聖騎士側の味方するようになるからな。先に動かなければならなかった理由は、暗黒騎士側の意見を通さないため。後から、違うだのなんだの言われても、人間は信じられない生き物からな。」

「……さすがですね。その通りです。実際もその作戦は成功しました。」

……語尾を伸ばさなくなった。どうやら切羽つまってきたみたいだな。

「だが、それなら暗黒騎士は……。」

「ただ、人間の意外性が私達を救いました。正義を信じるものもいれば、悪に共感するものもいる。……まあ、そんな策略を見抜い

ていた人間が、一人いたんですがね。」

見抜いていた？ 情報を操作されたにも関わらず？

「それは？」

「それが魔王様のお母様ですよ。」

「……………」

「あまり驚かれないんですね。」

「今更、その程度じゃおどろかないさ。」

今更、母さんだの父さんだの言われても…………？
俺の母さんや父さん？ どんな顔をしていた？ どんな声だった？
どこで一緒に暮らしていた？ むしろ一緒に暮らしていたのか？
わからない。 いや、それより、…………俺は子供の時、どんな感じ
だったんだ？

「事件前後と大切な記憶を失ったはずだ。」

…………いま、理解した。 どうやら大切な記憶とは、子供の時の記憶
らしい。

俺が覚えているのは中学までで、それ以前の記憶がまるでない。
いや、思い出せないといったほうが正確か。

「…………記憶喪失ですか。なら、私からはお話しないほうがよろし
そうですね。無理に記憶を呼び戻すと、脳にダメージを与えると
言われていますからね。」

「……そうだな。それには今後、ふれないでおいてくれ。」

そう。失ったものは自分で取り戻すしかない。……めんどくさいが……。

「んで、俺は魔王なんだよな？けど、俺は無能力者だぜ？」

「大丈夫です。むしろ普通といったほうがいいでしょうか？」

「普通？」

「ええ。人間と我等は少し違うのですよ。」

「？」

「あまり口では説明しにくいので、まあ、そのうちわかりますよ。ただ、人間は人間の能力。天使には天使の能力みたいに、それぞれの能力はそれぞれの種族にしかつかえません。」

「……。」

「ですが、魔王様は特別です。全ての能力を使うことができるんですよ。」

「？」

何故だ？

「先代様、つまり、魔王様のお父様が暗黒騎士と聖騎士のハーフで、

それに人間であるお母様の血もはいつているので。」

「なるほどね。」

「悪魔と人間のハーフなんて、歴史上二人しかいませんからね。そこに天使の血も入っていると……魔王様は歴代最強です。」

「ハーフなんて、そうそう生まれるものじゃないですよ？」

「なんでだ？」

「根本的に数が少ないんですよ。聖騎士勢力も暗黒騎士勢力も、大半が人間で、悪魔や天使は10人ほどですから。」

……あまり興味はない。

「んで、魔王っていつても、何したらいいか全くわかんないぞ？」

「いいえ、むしろ何もしないでください。」

「？それでいいのか？」

「先ほども言いましたが、いま、世界は均衡しています。むしろこちらが手を出してしまったら、再び争乱の世となってしまうからですね。」

確かに。

4話（後書き）

悪魔⇨暗黒騎士

天使⇨聖騎士

どちらも同じ意味です。
というのが一般的ですね。

勢力などで使うのが暗黒騎士、聖騎士

5話

こちらから動けば、それこそ戦争の幕開けとなりかねない。

「だが、わからない。お前は、俺が人間の能力を使えないことが普通とிட்டた。だが、俺は三種類の血をもち、全ての能力が使えるのだろうか？ 矛盾していないか？」

「だから、昨日まで能力が使えなかったことが普通なのです。」

昨日まで？

「そもそも、私はいつから魔王様の家にいたかわかりますか？」

……？

「俺は今日、初めてみたが？」

「……実は中学の時から貴方の横にいたんですよ。」

…… 大体理解した。

「つまり、今まではただの無能力者としての人間だった。ただ、昨日、何かがあつて、俺は能力者として目覚めた？」

こくり。と生物は頷いた。

「ただ、何が原因でタガがはずれたかは私にもわかりません。一つだけいえるとすれば、今まで能力がつかえなかった理由は、貴方

自身です。 幼少の時に、自ら封印してしまったようですね。 理由はわかりませんが。」

「……」

信じ難い話だった。

だが、生物が見えるようになったところや、話のつじつまがあって
いるため、信じるしかなかった。

「口で説明するより、実際にやってみてもらったほうが理解できそうですね。」

「まずは、自分の全てをさらけ出すみたいなき感じにしてみてくださいませんか？」

俺は言う通りにしてみた。すると、身体から湯気のようなものが
体の周りに纏わり付いている。

「それがオーラです。オーラは能力を使うときに必要だったり、
物理攻撃時のパワー、スピードに比例します。ですから、オーラは
多ければ、多いほどよいということですね。」

「なるほどな。オーラを体内に納めることも可能なのか。」

「さすがは魔王様。覚えも早いですね。ではこちらをみてください
い。」

生物は鏡に俺の顔を映し出した。

俺の瞳が を四十五度回転したような感じになっていた。

「それは、ディバインレリック。選ばれた者だけが使うことを許される眼。その眼でみるだけで、能力の起源がわかります。」

……魔王とはそんなに恐ろしい力を持っていても、勢力を一つにまとめることができないのか。

「私がお話出来るのはここまでです。」

ようやく説明が終わり、俺はオーラとディバインレリックを元の人間の状態に戻した。宙に浮く妖精？のような生物もつかれて、床に座った。

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺は立花 遊。遊ってよんでくれ。」

「私はマヤです。魔王様」

……その魔王様というのはあまりいい感じではないが……まあいいか。マヤは三十？ほどの体格がなく、一般的な小さい悪魔みたいな女の子だった。

「さつきも聞いたが、俺はなにもしていいんだな？」

「ええ。今まで通りの生活をしてください。能力をやたらと使わなければ、問題はないですね。」

それをきいて安心した。面倒なことさえなければ、俺はなんだっていい。

今日はつかれた。早く寝てしまおう。

「死」 ……え、化 ……」

なんだ？これは？

「お前が… ……から、世界……、。。」

夢なのか？ 男の子がいじめられている。

だが、何故反撃しない？ ちゃんとオーラをまとっているのに…

「僕は…。。。」

シリシリシリ？

「……………」

いつのまにか朝になっていた。 やはり夢だったのか。

「……………まあ、いいか。」

あまり気にすることもなく、俺は学校に向かった。

俺の横でいびきをかいていたマヤを無視して。

外は相変わらずの快晴。 気持ちがいい。

……どうやら俺は、今の状況を嬉しがっているようだ。

自分が魔王だったから？ 能力が使えるようになったから？

退屈

せずにすみそうだから？ ……どれも違う気がする。

「……まあいい。面倒だ。」

重要であることがわかっていながら、俺は考えるのをやめた。

教室につき、自席に座ると、不知火が突っ掛かってきた。

6話

「立花、貴方やっぱり普段手を抜いていたのね。」

不知火が俺の机の前に立つ。

……

「俺には何のことだかさっぱりわからないんだが？」

俺は両手で、「さあ？」のジェスチャーを作る。

「白を切るつもり！？　じゃあ、あの事故の時、あれほど早く動けたのは何故！？　あれは尋常じゃなかった。」

不知火は身を乗り出してくる。

事故の時？　ああ、そういえばこいつは俺の後をつけていたみたいだったな。　本当について来るとはおもわなかったが、そもそも当の本人が事故の記憶がない。

医者から聞いた話によると、偽善者みたいなまね事をして、またありえないほどの力をみせてしまったらしい。

……まあ、かくしていたわけじゃないし、自分は超人だとか、アニメみたいな設定があるわけでもないが、どうしようもないな、俺は。

「普段から身体を動かすのが好きなんだ。　だから一般人よりは早く動けたりするんだ……てのは納得いかないか？」

「・・・さい。」

「なんだって？きこえなかった。」

不知火は下を向いてプルプルしながら、なにかをいった。

「私と勝負しなさい？」

「はあ！？」

いきなり何を言い出すんだ？ こいつは？

多分勝負とは、能力を使ってタイマンで喧嘩しようって言うてるんだらう。

「あんだ、何か隠してると思ってたけど・・・やっぱり、私の見立てに間違いはなかったみたいね。」

「……一つきいておきたいんだが、それは戦闘的なもので間違いなのか？」

「？。もちろんよ。勝負って言うて他になにかあるの？」

「……はあ。ツッコミ所満載だな。新手的漫才かなんかか？ 大体、何で俺みたいな無能力者と戦いたいんだよ？」

「なんでって、そりゃあ……面白そうだから？」

「疑問形を疑問形でかえすなよ！？ なんだこれは？新手的いじめか？いや、いじめに違いない。この人はSとみて間違いない。」

「ちよっ！？なんでそうなるのよ？ 大体、これには正当な理由があるわ。」

「正当な理由？」

そんなものが存在するのか？ どこからどうみたっていじめそのものだ。

「これは、風紀委員の委員長と副委員長を決める、大事な儀式よ。」

……？

「……えーと、全然状況が理解できないんですが？ 不知火さん。」

「だから、私と貴方で戦って委員長を決めるの。 わかった？」

「わかるか 大体なんで俺が風紀委員になってるんだよ。 あれは学校全体で五人、しかも立候補が推薦で決めるもんだろ。」

「昨日決めたのよ。 あんた、昨日いなかったし。」

形式上、立候補ってことになってるから、放棄は出来ないわよ。」

そう言っって不知火は笑顔で、親指を突き出してくる。

「……その輝かしい笑顔と突き立てた親指をおろせ。」

何故、俺がこんなことに。

「んじゃ、今日の放課後、特別室9ー16にしゅごうね。」

……「こいつもやる気まんまんだし。　ん？待てよ？」

「そもそも、俺ら二人だけできめていいのか？」

風紀委員は俺達を含めて、あと三人はいるはずだ。

「今年は二人しかいなかったから、私達で集める。って白石先生が。」

……なんて適当な学校だ。全く。生徒の自主性、自立を重視するとはこのことをいうのだろう。他の高校に自慢してやりたいくらいだ。

ところで一つ、気になってたことがあるんだが。

「なんで俺の後ろに机があるんだ？」

一番後ろの席は俺のはずだ。なのに俺の後ろには、一つの机が存在していた。

「ああ。それは、……」

「ユウくんっ？」

ちょうどその時、ドアを開けて、白い髪の女の子が入ってきて、俺の名前を呼んだ。

「……？」

「あのっ、その、一昨日はどうもありがとうございました。それと、

「ごめんなさっ・・・きゅあぁー???.」

.....俺に頭をさげようとした時、.....女の子は、盛大にコケた。

7話（前書き）

学校に行くとまた面倒なことに。

なんと、不知火と勝負することになってしまったのだ。……ってか、いつの時代だよ、決闘って？

そして、俺の後ろの席には、知らない席が一つ。

多分、その席に座るであろう女の子は、何故か俺の名を知っていた。

7話

顔面から盛大にこけるなんて……この娘もついてないな……っか
大丈夫か!?

「立花? あんた、女の子に手を出すなんて、」

「違えよ!?! どうみたって、今は事故だろうが!?! ……大丈夫か?」

「いててて、あっ、その、はひっ。大丈夫でしゅ。……噛んじゃった」

……。

「……まあ、怪我が無くてよかったな。」

さすがの俺も動揺していたようだ。女の子に手を差し延べ、引き上げる。

「あう〜。すみません。何度も助けてもらって。」

何度も? 今日初めてあつたはずなんだが……。

「あっ、申し遅れました。私は新山 美由といいましゅ。……また噛んじゃった。」

……やっぱり聞いたことないな。新山 美由といった少女の髪は美しく、白銀の雪のよう〜で腰くらいのロング。顔立ちは綺麗というより、可愛いに入るんだろう。そして、何と言っても、

豊満な胸。 クラスにいた、数人の男子が、「すごい胸だあ。」と、沸き立っている。 …… D? Fあるんじゃないか?

「みゆっちは昨日転校してきたばかりなの。 って、もう二人とも顔見知りなのよね。」

?

「いや、今日初めてあつたが?」

「えっ!?! ……覚えてないんですか?」

「なにいつてんの? あんた。 一昨日、あんたが助けた女の子じゃないの。」

この子が? 俺は確かにおぼえていないが、話は医師から聞いている。 ぬいぐるみを拾おうとした女の子を俺が助けたらしい。

「あのおつ、本当にありがとうございました。」

「……別に。 身体が勝手に動いただけだ。」

……実感はないが。

「……挨拶は終わった? んじゃみゆっち。 話があるんだけど、いい?」

「はい? なんでしょう。」

「風紀委員に入らない?」

……早速始まった。

「風紀委員ですか？」

「ええ。いいわよね？　いいに決まってるわよね？　むしろ自分から入りたいわよね？」

「えっあのっ、しよの、」

……動揺が隠せてないぞ、新山さん。

新山さんは俺に期待の眼差しを向けてきた。助けてほしいのか？

「あのっ、一個聞いてもいいでしゅか？」

「なに？　言っとくけど、拒否権なら無いわよ。」

ないんかい！？

「そのっ、立花君は風紀委員なんですか？」

……新山さんは喜びの顔を隠そうとしているが、バレバレだ。よっぽど平仮名の「す」を言ったことが嬉しいらしい。

「……不本意ではあるが、俺も風紀委員だ。」

「それで、みゆっちははいるでしょ？」

「……はい。わかりました。」

……半ば強引に引き入れられた新山さん。
その後、すぐに鐘がなり、授業となった。

……今は、歴史の授業中。

「世間でいう吸血鬼、ゾンビ、鬼等といった卑劣で愚かな生物達を率いて反乱を起こした魔王だったが、聖騎士達は神の力をつかい、反乱を食い止めたんだ。よくおぼえておけよ。」

今聞くと、やはりおかしく聞こえてしまう。あの悪魔、マヤの言っていることの方が正しく感じてしまう。吸血鬼、ゾンビ、鬼といった種族は確かに存在していたのかもしれない。
だが、悪魔や天使は存在しても、数的に10位。その中に吸血鬼だの、何だのが含まれる。大体、そんなもんが存在していたら、この人間の世界なんて、とうに滅んでる。

……まあ、数的に言ってもおかしいが、何よりそういった種族は、神話より語られているもの
……明らかにおかしい。

だが、ひとつだけ納得できるのは、いつも、歴史は勝った方が正義となり、話をいくらでも書き換えられる、ということだな。

……そう思うと気分が悪いな。

同時に席を立ち、教室のドアへと向かって歩く。

「おい、立花。何処に行くんだ！？ 授業中だぞ！？」

「……トイレですよ。」

教師に呼び止められたが、俺は構わず、教室を出て、いつもの場所へと向かった。

8話（前書き）

事故で助けた少女、新山 美由。

だが、記憶喪失により、初対面だと思う少年、立花 遊。

ここにも、新たな、始まり、が誕生していた。

8話

いつもの場所……それは、屋上。

まあ、定番といえば定番だし、理由も風が気持ち良くて寝やすいから、という普通の理由だ。それにひろいしな。

「……………」

暖かい太陽の日差し、自然の香りを運ぶやさしい風、心を癒す鳥の声。この平穏な時間がいつまでも続けばいい。

そんなことを考えながら俺は、屋上の真ん中あたりに寝転ぶ。だが、その平穏な時間は、ドアの音によって終わりをむかえる。

……………ぎい〜。

屋上のドアが開く音がした。

「やはりここにいたわね。手間が省けたわ。」

……………不知火？　なんでここに？

不知火は仁王立ちで立ち、右手を俺へと向ける。

「さあ、立花。私と戦いなさい！」

そう叫んだ不知火の掌から炎が放たれる。

「うお〜〜！？」

俺は、神回避とも言える横っ飛びで、火に当たる寸前で避けることに成功したが、かすった服は少し焦げ臭く、直撃したフェンスは丸

い円形の穴がポツカリと開いていた。
待てよ！？ 鉄が溶けてるぞ！？ あんなもんだったら、俺の
体なんか骨ひとつ残らねえ！！

「殺す気が！？」

「ええ。」

「ええ、つじやねえよ！？ あほか！！؟؟？」

「それくらいでやらないとつまらないでしょ？ それに、貴方がオ
ーラを隠していることには気づいてるわ。 その程度では死なな
いはずよ。」

つまらないって、そんな言葉で済む威力じゃなかっただろ。
だが、まあ……完璧にオーラを消していたと思っていたんだが……
まだうまく扱えてないみたいだな。

「だが、俺は闘いたくない。」

「なんで？ 自分の力を試そうとは思わないの？」

不知火は不思議そうに首を傾げる。 いや、不思議でもないだろ。

「……闘ったつてめんどくさくなるだけだ。」

「呆れた。……なら死ぬしか無いわね。」

この学校では、戦闘になった場合、生死に関して学校側は干渉し

ないらしい。

つまり、生きたいなら自分でなんとかしろ。ということだ。

だからといって、俺は闘いたくない。かといって死にたくもない。なら、適当に闘って負ければいいか。

「……………」

「あくまでも本気を出さない気なのね。……………なら殺す」

屋上であるということ、遠距離攻撃は出来ないのだろう。おそらく、遠距離のような能力を使えば、下の校舎にいる生徒たちにまで被害が出てしまう可能性もある。

……………こういうところはやさしくせにさ。

不知火は、右手を横に構えると、空間を歪め、そこから自身の身長くらいある、薙刀を取りだした。

「炎槍グランオルグ。刺されば、その箇所から徐々に体温を上昇させる。一定温度を超えれば……………解るわよね。」

人間は、42度を超えれば死……………なんて現実的な武器だよ。

……………マジで殺す気か？

不知火は、ひたすらに、的確に俺の身体目掛けて薙刀を振ってる。

何とかかわせてはいるものの、時間の問題というものだろう。

そして先程の言葉、脅しの言葉ではないようだ、槍をかすらせてみたが、かすった場所は確かに熱くなり、全身に広がっていく、軽い熱のような症状だ。

……………本気みたいだな。……………仕方ない。まだ死にたくはないし

な。……めんどくさいな。

全てをさらけ出す……。

手を顔の前に、目を押さえるように。

そして俺は、ようやくオーラとデイベインレリックを解放した。

「やはりオーラを……っ！？ なんなのこのオーラ量とその眼は！？」

不知火は驚きの表情を見せ、一步後ろに飛んだ。

マヤの話では、イメージすることで能力がだせるらしい。

かといって、遠距離は使えない。

なら……不知火のをイメージする。

俺は、右手を横に構え、空間を歪め、そこから剣を取り出した。

能力も名前もわからない。不知火の武器にも能力があった。

人を殺めるほどの。

なら……やたらにこの剣を使うわけにはいかないな。

「私は……そんな力に屈したりはっ！！！」

不知火は今までで一番早いスピードでこちらに向かってきたが、すでに俺は見切っていた。デイベインレリックのおかげで、双方が剣と薙刀を交差させる。

……

「……俺の負けだな。」

結果、不知火の薙刀は俺の剣を弾き、俺の顔の前で止まっていた。そこで授業終了の鐘がなった。同時に不知火は、薙刀を一瞬で消す。……一瞬で消すこともできるのか。普通の眼に戻し、俺は遠くに弾かれた、名も知れない剣を消すことに成功し、立ち上がった。

そして、そのまま屋上を出ようと階段へと向かったのだが、

「何故本気を出さなかったの？」

不知火に呼び止められた。何故？……確かに俺は、不知火の動きを見切っていた。確かに勝てた。だが、俺は勝とうとしなかった。

何故だろう？ めんどくさかった？ 委員長になりたくなかった？

女の子を傷付けたくなかった？

……最後のは当たり前だろうが、他にも理由があるような気がする。自分でもわからなかった。

「何故なの！？」

不知火は怒鳴る。

「……俺はこの能力、オーラを得てからまだ一日くらいだ。いくらオーラ量で勝っていても操作能力、戦闘能力ではお前が上だったんじゃないか？ だから負けるのは必然だった……と俺ならそう解釈するけどな。だから、だれがどこから見たってお前の勝ちだよ。誇っていいんじゃないか？」

そうやって俺は教室へと向かった。 ……ちよつとかつこつけみ
たいだったな。

……
不知火は完璧に負けたと思い、そのまま屋上でねっころがっていた。

「……陽介の眼に狂いはなかった……ってことかしらね。」

立花 遊。 人とは思えないほどの身体能力、オーラ。 それでい
て、力を過信しない。
周りを思うやさしさ。

「……力強い味方……いえ、仲間と知り合った、か……いつもすぐ
に騙されるから、今回もそうなんじゃないかと思っていたけど……
大丈夫そうね。」

不知火京子は、やさしく微笑む。
これから起こる、出来事に対して、不知火は希望を見つけた。

「順調……かもしれないわね。」

私たちにはまだ解らない。 だが、おのずと見えてくるだろう。
物語が進めば。

8話（後書き）

こんにちは、シンです。

今回のバトル、いかがでしたでしょうか？

バトル初めてで、インパクト弱いな、とか、伝わるかなあ？とか、非常に不安でした。　まあ、いつもどおり、アドバイス待ってます。

さて、今までも色んな伏線が隠れていましたが、今回のも重要ですねえ〜。

……言いたいのはやまやまなんですけど、ネタばれの為、何とも言えないです。

不知火の能力ですが、ありきたり……っていうことを言われるのを覚悟しています。

ですが、自分的には、グランオルグの能力はよくできたと思います。

　　いかにファンタジーな世界でも、科学的能力は活躍できるんだ！……みたいなそんな感じですよ。

長くなりましたが、こちら辺でお暇させていただきました。

よろしければ、次もお読みください。

ありがとうございました。

9話（前書き）

勝負に負けた遊は、教室へと足を向けていた。

9話

教室に戻ると、授業は終わっており、クラスメイト達は下校を開始していた。……まあ、チャイムが鳴ってたからな。
俺も、それに従い、下校の準備を始める。

「遊。一緒に帰らねえか？」

と、陽介に誘われたが、俺は、夕飯を買いに行く、と言って断った。そして、帰る準備の整った俺は、鞆を持ち、一人、商店街へと向かった。

「……商店街に来て、思い出せないな。」

時刻は四時を回ったというところだろうか。　　いまだ、空は明るい。
事故のあった場所に来てみて自分が記憶障害であることを、初めて実感した。　何も覚えてないのに、周りが騒ぐからな。　嫌でも実感してしまう。

時刻は六時前後。　　ようやく日も落ちてきて、空の色も青から、オレンジ色へと、姿を変えていた。
買い物を終えて、近道をしようと、裏道から帰ろうとする。、と小

さな女の子が一人の男に迫られていた。

……何だ？このアニメみたいな展開は？　うちの制服きた女の子が、白いスーツをきた男に迫られている。

「……はあ、面倒だな。」

ただでさえ疲れているのに。　最近の事故、事件のエンカウント率が高すぎる。……しばらく様子を見るか。

「ここまでだよ。君の力を使ったとしても、私から逃れられない。……死んでもらう。」

……どうやら、時間がないらしい。

「しゃーねえーな。」

俺は夕飯の材料をもったまま駆け出す。

「！？　なんだ？」

男の横をすり抜け、女の子の手を掴んだ。

「……こつちだ。」

女の子は抵抗することなくついて来た。　制服や状況を見て判断したのだから。

俺達は裏道を抜け、何とか男を撒いた。

「……」

「あの、ありがとう。助かった。」

小さな女の子はそういつて俺に頭を下げた。

「…………別に。たまたま通りかかったただけだ。」

素っ気なく振舞いつつ、買い物袋の中身を確認する。

…………卵だの、米だの、魚だのがすべて混ざり合い、カオスな世界になっていた。

「…………。」

流石の俺も涙目である。

「あの、よかつたら夕食一緒にどうですか？ 私、美味しいところ知ってるんです。」

「本当か！？ ……あつ、いや、しかし…………」

家にはマヤがいるんだった。あいつの食べ物も作ってやらなきやいけないしなあ…………

「…………ちよつと家に寄りたいたんだが…………大丈夫か？」

…………なんか、周りの人が聞いたら、って思うとヤバメの発言だな。

「別に私は構いません。大丈夫です。」

…………まあ大丈夫か。

「私も一ついいですか？」

今度は少女の方から質問された。

「私が聖騎士側だと言っても……驚きませんか？」

それから俺の住む学生寮へと向かった。少女には、外で待ってもらい、俺はマヤに事情を説明する。

「私は何でも食べれます。そのぐちゃぐちゃのご飯でもいいですので、魔王様は楽しんで来てください。」

「いや、でも」

「いいですから。こういう時は空気を読むべきですよ？魔王様。」

語尾を伸ばさずにしゃべるマヤ。

「……？何を言っているのかさっぱりわからなかったが、俺は少女と二人で食べることにした。」

そして着いたのは小さな定食屋。少々汚く、古い。だけど、こういう小さい店ほど美味しいんだよね。……この子、よくわかってるなあ。

中に入ると、俺達は四人席に座った。

「そういえば、俺金をほとんどもってないんだが。」

「大丈夫ですよ。ここ、私の友達が働いてるのでお金いららないんですよ。」

先ほどとは違い、にこやかな表情で話す少女。

……いいのか？ 払わなくて。そういうのって結局、働いてる子が負担するんじゃないか？

しかも、男として、かなり情けない気もするんだが……

「申し遅れました。私は梶原唯かじわら ゆいと申します。見ての通り貴方と同じ高校の一年ですよ。立花先輩。」

少女の名は、梶原 唯。うちの高校の一年で、俺の後輩らしい。

身長は……白石先生よりも低く、130cmくらいか？ 金

髪でショートカット。陽介に言わせれば、萌え……、とかい

うくらいの幼女。……身長も、顔も。性格はきつと明るいの

だろう。さっきの笑顔で解る。

だが、不自然な点を感じた。

「……何で名前を知ってた？」

この子とは初対面のはずだ。なのに、おれの名前を知っている？

「まあ、順を追って話していきましょう。まず、私は聖騎士側の人間でした。」

さつきも言っていたな。

でも、でした？ ……過去形か。

「ですが、一年前、ある実験を見てしまったため、私は聖騎士側から離脱しました。」

唯は下を向く。

「実験？」

「ええ。それは……人体実験。」

……。俺は耳を疑った。俺の聞いた話によれば、三勢力の中で医療、機械系技術が一番発展しているのは人間。その人間でさえ行えない人体実験を聖騎士達が行えるはずがない。

10話（前書き）

学校の帰り道。裏道で助けた女の子（梶原 唯）は聖騎士側の人間だった。

だが、話によると、聖騎士側の人間、だった、らしく……。

「正確には、能力覚醒実験、とでもいいでしょうか。この実験に機械は使いません。まあ、その名の通り能力を覚醒させるためのものです。」

機械を使わない、か……なら、説明はつくのだろうが、イマイチ納得は出来ないだろう。

「もちろん、私も目を疑いました。ですが、調べているうちにどんどん確信に変わってくるのです。」

歴史の情報操作。能力開発。そのどれもが私の信じてきた事と異なっていた。」

……。人に、いや、信じてきた国に裏切れる事の辛さを、唯は物語っていた。・・・そのつらさを俺は少しわかる気がしていた。

……なぜだろう？

「そして私は聞いてしまったんです。神の力の真相を……。」

神の力……そんなもの、存在するのか？

恐怖で体を震わせている少女。……。

「……神の力、か……興味ないな。話を進めてくれ。」

少女のことを気遣ったこともあり、話をスルーしようとする。

だが、それが一番の理由ではない。俺は信じない。神。運命。

定め。そんなもの、人間がつくった幻想に過ぎない。今まで

そう考えて生きてきたからな。

「……ありがとう。それじゃ、話をつづけましょう。」

丁寧な頭を下げる少女。

「真実を知った私は、天使側にこれ以上いることができず、中立側の、この日本に来てしまったということです。」

……まあ、適切であるといえばそうだろう。

中立側ではなく、暗黒騎士側に行っただとしても、話を信じてもらえず、死んでしまう可能性が高いからな。

「そしてこの一年間、私は貴方について調べていた。」

「……？ 話が合わないんだが。何故俺について調べていたんだ？」

「私は、暗黒騎士側につくことにしたんです。私が信じていた国は聖騎士側ではなく、暗黒騎士側であったからだと気づいてしまったんです。」

……それで、魔王である俺のことを、か。となると、さっき追っていた連中は聖騎士か。

「……君のことは分かった。でも、俺のことなんか調べてどうするつもりなんだ？ ゆつとくが、俺は正義だの悪だの、ましてや国の理想なんかに興味はないぞ。」

そう。そんな面倒なものに興味はない、いや、かわりたくない。

それに、実際に王位に就いているかさえ、わからない状態だ。

「そう……ですか。わかりました。」

少々、悲しい顔をしている少女。 ……ひどいことを言ってしまったか？ だが事実だしな。席を立つ少女。

「すみませんが、用事を思い出しました。私は先に帰りますが、気にせずゆっくりしてってください。」

「えっ？ あ、おい？」

涙を浮かべた少女は、席を立つと勢いよく、店を飛び出して行ってしまった。

……最低だな、俺は。

だが、めんどくさい事には関わりたくない。 普段もそうじゃないか。これが普通なんだ。

でも、なぜだろう？ 女の子が困っていると助けたくなくなってしまっ。めんどくさいはずなのに。なぜだ？ 昔、何かあったのか？

ズキッ！！

「っ！？」

考えていると、突然頭痛が走った。 ……思い出そうとするとこれか……。

「あの、ご注文がまだなんですが……」

店員のバイトさんらしき人が、俺に注文を聞きにくる。

……。

「悪いな、バイトさん。注文は、無しだ！」

そう言っつて、俺も急いで店を飛び出す。

「……覚悟を決めたか？ 梶原。」

「ええ。」

誰もいない、真っ暗な裏道。狭くはなく、広くもないといった感じだろうか。

そんな裏道で、唯は昼間の男と向き合っていた。

「梶原。なぜ、我等を裏切った？ 君ほどの能力を持ちながらなぜ悪に荷担する？」

男は白いスーツで、普通の体格。金髪でツンツンな頭をしていた。

「悪？なら聞きますけど、暗黒騎士達は何故悪だと呼ばれているのですか？ 史実では、彼等が暴拳の道に走ったことはいはすです。それなのに、あなたたちは多くの人間を騙して。」

「…情報操作について、知っているのか。」

だが、男は驚きを見せない。むしろ、頷いていた。
上からの情報と照らし合わせているの？

「だが、大丈夫だ。今、戻れば、あのお方も許して下さる。」

「お断りよ!! ……あなたも昔は、そんな人ではなかった。

周りからは英雄と称され、仲間や民からも信頼されていた!!

なのに、今はどう!? 周りからは暗殺者アサシンと呼ばれ、怖がられ

て、誰一人としてあなたに近づこうとしない。 ……人体実験が、

あいつが、あなたを変えてしまった!!」

「なっ!？」

一瞬、動揺したかのような反応を見せる、白いスーツの男だったが、

「まさか……実験まで知られていたとはな。 秘密を知った以上

……死んでもらう!!」

男は、唯の心臓を、手刀で貫こうとする。

その時、唯は目をつぶった。 闘う力はあつたのに。 ……それは

無論、自分の信じてきた国と闘う意志が固まっていなかったからだ
ろう。 いや、最初から、死を覚悟していたのかもしれない。

「（私もここまでか。 ……約束を果たせなくてゴメンね。 ユウ兄
さん）」

唯は覚悟していた。 が、いつまでたっても相手の手が自分の心臓
を貫くことはなかった。

目を開けた。すると、そこには想定していなかった人間が立っていた。

「死んでもらうって……どっかの時代劇かよ？……全く。世話を焼かせる。」

「先輩！？何故、追って来たんですか！？ ゆっくりしていつて言っただのに……」

10話（後書き）

やっと、戦闘終わった……と思ったら、また戦闘！？
って感じ
ですww

今回も、伏線？らしきものがたくさんありましたね。

まあ、まだ物語は始まったばかりです。急がず、じっくり行き
ましょう。

11話(前書き)

死を覚悟した少女、唯。

心臓を貫かれそうになるが……？

11話

掴んだ男の手首を離すと、男は後ろに飛び、距離をとった。

……やっぱり放つてはおけないだろ？ ……まあ、一応男として。

「……たまたま通り掛かったただけだ。」

「たまたまって……」

「貴様は……そうか。貴様が……。」

男は、一人でブツブツと言っている。

「……おしゃべりは終わりか？魔王。」

敵であろう、白いスーツの男がこちらに話し掛けてきた。 ……魔王、か。 正体はばれているみたいだ。

「……できれば、この場もおしゃべりでお開きにしたいんだが……」

「それは貴様次第だ。 そちらの女をこちらに渡せば帰してやる。」

「……お前はバカなのか？ ここで渡すくらいならさっきの一撃を弾いてないだろう。」

「ならば……お前も死ぬ」

「唯！ 下がってる！」

唯は、指示に従い、通りの端の方にあつた木箱のような物の後ろに隠れた。

白いスーツの男は戦闘体制にはいつたようだ。俺も眼とオーラを解放し、目の前の現状を打開することをきめた。

……イメージすれば、能力は使える。能力は魔法みたいなものだが、魔法ではない。根本的な違いは才能。魔法は才能の無いものでさえ術式、術名を唱えれば使うことができる。が、能力は生まれ持った才能そのもの。能力はその者にしかつかえず、それをイメージするだけで使用可能である。

まずは先手必勝。……シューティングレイ。光の閃光が相手を突き刺す能力。……牽制には持ってこいだな。

俺はイメージした能力を現実にし、奴にむかつて放ち、突き刺した。……はずだった。

「!？」

だが、それは奴の手前で消えた。いや、正確には弾かれた？ 奴は動きさえみせていないのに？

「魔王もこの程度か。つまらん。」

何かしらの能力を使ったのか？ しかし、能力を使えば俺の眼で起源を読み取れるはずだ。なのに反応しない……どういうことだ？

「彼は戦闘で傷を負ったことが無いんです。それは彼の周囲に発

生しているバリアーみたいなものがそうしているらしいのですが……」

唯は落ち着いた口調で俺に助言した。……傷ついたことがないか。……ふざけた話だ。負けなしなら分かる。しかし、傷なしというのは……。

「所詮、魔王もその程度ということだ。なら、すぐに終わらせる
としよう。」

奴は腕を体の前で一振りした。何かくるか!? ……見えた!!
これは能力みたいだな。避けっ……

ブシュッ!!

瞬間、何かが切れた音がした。

「っ!? 遊さん!! 右腕が!!」

右腕? なんだというのだ? 俺はつい、左手で右手を触れようとした。が、その空間に右腕は存在しなかった。いや、右腕は肩からすっぱり切り落とされていた。

「……………」

……マジかよ。こりゃ、本格的にまずいかな? ……だが、こういうときほど冷静でいられるものだ。痛みは感じない? 確かにそれもおかしいとおもったが、それ以上におかしいことがあった。

「(血がでていない?)」

そう。切り口からは血が出ていない。……どういう……っ！！

「くっくっ。魔王もこの程度か。まあ、安心しろ。梶原は殺さずに連れていく。……まあ、向こうでどうなるかわからな……」

「ゲウっ……アア。！！」

「！？腕が……生えた!？」

俺の切られたはずの腕は、俺の叫び声とともに生えた。

「……腐っても魔王ということか。化け物め。」

……今回はかりは否定出来ない。自分ですら、魔王であることを実感しているからな。

「だが、いくら再生しようとも私の攻撃は避けられまい。」

再び腕を一振りする。が、俺にはもうあたらない。

12話(前書き)

避けられないこともある。

闘いも。運命も。定めも。

12話

奴の起源は読みきった。　　デイバインレリック。能力の起源（特質、威力、範囲等）を認識してしまう眼。　　一度見てしまえば、能力への対応が出来てしまう。

奴の能力はウインドカッター。その名の通り、風をおこし、切り裂く。範囲は腕や脚の振る範囲。威力は範囲によって違う。広がるに連れて威力は下がっていく。

……これだけで、みえなくても十分避けることができる。　　そう。腕の振り方だけで。

「くそっ！！何故当たらん！？　　……だが、我に傷をつけることはできませんだ！！」

……確かにな。　　あのバリアだけはよみきれない。　　……試してみるか。

全身のオーラを集中させ、イメージし、具現化させたらどの程度の威力なのか？……多少、興味はある。

イメージ……突き抜けるイメージ？……槍か？……具現化。

ブラッディ・ストライク。黒い槍のようなものが、相手に突き刺さる。……どうやら、さっきのシューティングレイより、数倍威力が上みたいだな。

「……くえ。」

先程のように、槍はバリアに弾かれるかのように思えた。

「だから、無駄だと……っ!？」

が、槍はバリアを突き破った。が、奴の顔に届くまでに消えてしまった。

「はっ……ははっ。少々、誤差が生じたいが、やはり私の勝ちだ。魔王!！」

「……」

「どうした万策尽きて、おだんまりか!？」

「かなりの興奮状態みたいだが……お前の弱点をみつけた。」

「何?」

「まあ、みておけよ。……まずは足元。」

俺は、相手の足元から、空間を歪め、攻撃を仕掛けた。

「普段、人間は地面を歩いて生きている。どうやら、そのバリアはお前を中心に円形で機能しているが、下からの攻撃には対処しきれないのだろう。」

慌てて男は後ろに避ける。そのスキを俺は見逃さない。

「そしてもう一つ。そのバリアは能力に対してしか働かない。だから……」

一気に距離をつめる。

「円の内側で能力を発動させれば、関係ない!!」

円の中に入った。手にオーラを集中　!!

「デッドハン」

「……やはり甘いな。ユウ。……俺に変われよ」

「!?!」

その声が聞こえ、右手黒く光りだした時には、遊の意識はとんでいった。

その男（魔王）は、暗殺者をあと一步のところまで殺せなかった。手を突き刺そうとした瞬間、彼に異常な現象が起こった。

「!?!」

「（私は夢を見ているの!?　今までも不自然だった。見たことも無いオーラ量、腕の再生。でも、これは流石に……）」
遊の髪が段々、白く、長くなっていく。それだけではない。さらにオーラの量も増えていく。

「……くくつ。あーっはっーはっは!!　いいねえ!!　久しぶりの外界だあ。きぶんがいいぜえ!!!!」

遊はまるで正反対の、白銀で長髪の髪の少年に変わっていた。

「（あれが……遊さんの?）」

「……貴様、一体誰なんだ?」

白いスーツの男は、驚きを隠せず、口を開く。

「アア？ 俺か？ お前は良くしってるんじゃないか？ まあいい。教えてやるよ。俺は立花 ユウ。遊であって遊じゃない。」

「？」

暗殺者はまるで理解できていなかった。当然だ。誰にも解るはずが無い。一人を除いては。

「解り難かったなあ。今の俺は気分がいい。教えてやるよ。さつきもお前は俺の名前をよんでたじゃないか。」

「……！？ まさかお前こそが」

「そう。俺様こそが……」

「魔王だ。」

13話……ではなく、変わり果てた遊！！（前書き）

勝ったかのように思えた闘い。

だったが、その瞬間、遊はかわりはて。

13話……ではなく、変わり果てた遊！！

その男は魔王といった。

確かに、遊とは比べものにもならないオーラの禍禍しさ。言動の荒さ。どれをとっても魔王に近い。

「くくつ。 やっぱり、遊は優し過ぎるなあ。 傷一つつけてねえし、ましてや、あの負荷システムすら破壊して無いのか。」

「……何故この力の名を知っている！？ それに奴は傷をつけていないのではない。 つけられなか」

「ハア 馬鹿か！？ テメエ。 そんなもんの名前くらい誰だって解るもんなんだよ。 それにそんなもんを破ることなんか、俺や遊、ましてや一般兵にだって出来るぜい？ まあ、遊は優しいからなあ。 大体、あいつ自体本気をだしてないからなあ。」

「なん……だと？」

「まだ信じられ無いみたいだなあ。 まあ、これからそれを証明してやらあよ。 アア。 あと、俺は遊みたいに、やさしかねえからなあアア！！」

いきなり、魔王は空気砲みたいなものを飛ばした。

「馬鹿めそんなもので。」

だが、バリアに当たった瞬間、バリアは弾けた。

「なっ！？」

「だからいったじゃねえかあよお。そんなんバリアですらねえんだよ。ランクでは1.5位だしよお。まあ、それを壊せなけりゃ、兵士じゃねえしなあ。」

「だが、これまでは！！！」

「これまで？ アア。それは兵士見習い以下の奴の攻撃だったか、あるいは神側の奴の攻撃だったんだろお。魔側は能力自体のパワーがでええからなあ。それに対して、神側はスピードが速え。が、パワーはねえ。そんなもん、ガキでも解るぜえ？」

暗殺者は啞然としていた。

「まあ、死ぬ前にお前御自慢の能力について語ってやらあよ。まず、ウインドカッター。特質は風、威力は範囲により変化。広けりゃ低、狭けりゃ高、って感じに比例してる。んで、その範囲を決めてんのは腕の振り方って訳だなあ。」

「くっ。」

「だが、スピードは速えよなあ。ディバインリックで避けらんねえスピードだしなあ。」

「では何故、奴は避けた」

「まだわかんねえかあ？ 範囲をきめんのはテメエの腕だぞお？ つまり、腕さえ見れば攻撃は予測可能って訳だなあ。ついでに、何故、首や心臓といった、命を奪える器官ではなく、右腕を狙った

かというのだ。」

魔王は続ける。

「反撃されないためだろ？ アサシンってのは、一発で仕留めるよ
り、確実に殺すことが目的だからなあ。それが癖として、出
ちまったわけだ。」

男は震えている。 …… 凶星、といったところだろうか。

「まっ、遊の腕切り落としたことは評価してやらあよ。 次は
負荷システムについてかあ？」

「貴様、何故そこまで……」

「そりあ、お前のしるところじゃねえやあ。 これでも譲歩してっ
からなあ。 だから、テメエは黙って聞いてりゃいいんだよ!!!」

……ユウの威圧感に暗殺者は、何もいうことが出来なかった。

「負荷システム。その名の通りだがなあ。 周りからの能力攻撃に
対して発動し、能力を打ち消す。 自動システムであり、一瞬だけ
発動するから、ダイバインレリックでは追いきれないんだろおなあ。」

「そこまでは解る。 が、何故奴は攻撃によって打ち消すことができ
たんだ？」

「何故？つてかあ？ んじゃ逆に質問だあ。 そのシステムの原理

は何だあ？ 攻撃をどうして打ち消す？」

それは……わからない。

「まあ、知らないのが普通だろうなあ。 教えてやるよ、気分いいしなあ。」

さっきもいったが、その名の通りだよ。 負荷だよ。 攻撃をプラスと考えるなら、システムはマイナスだ。 確かに、数直線上ではどちらも数値は同じ。 だが、物事のマイナスには限界があらあよって話やなあ。」

13話……ではなく、変わり果てた遊!! (後書き)

さてと。ここからが大変な作業になりそうです。

下書きを書いていたんですが、消えてしまったみたいで(TOT)

／

そして、サブタイトルが、ここからようやく変わります!! 期待。

今日中に、もう一つくらい、書きたいと思っています。

散る聖騎士、アルスの最期。(前書き)

未だ計り知れない力を持つ魔王、ユウ。

闘いは終盤。その力を見せるのだろうか？

散る聖騎士、アルスの最期。

「たとえば、温度が解りやすい例えだなあ。 温度も、上限はカギリネエが、下限はカギリがあらあ。 だいたい、そのシステムが全ての攻撃うちけしてたら、今頃はテムエらが世界をのつとつてんだろおがあ。」

……。

最早、返す言葉も無い、その男はまるで動かない模型、いや、動けない模型のようになってしまった。
だが、白銀の少年は、

「さあ、早く続きをやるうぜえ。 こっちは久しぶりの外界で、身体がうずうずしてんだあ。」

……。

「ふふつ。 私ももう終わりか。 案外早かったものだな。」

一介の兵士にすぎなかった私に、光を与えてくれた少女。 それ
が梶原。

彼女を守るためにと、国を守るためにと、頑張ってきたはずが、今では国に信頼されず、殺しの対象が、守りたかった少女か。
……人は変わるものだ。

「良いだろう。 わが名は、アルス・クロスワード。 元聖騎士、四聖剣がうちの一人。」

魔王、貴様を倒すべく、私は、私の命、全てをかける!!」

……再び、戦闘態勢に入る、アルス。 死を覚悟した男の眼だった。

「御託はいいから、早くかかってこいよ。 こっちはうずうずしてんだ!!」

ちっ。 ……俺はいつも悪者の位置だなあ。 誰かを守る、か。 ……いつかは言ってみたいセリフだな、おい!!

アルスは、突撃するために、足で能力を使い、地面を風の力で蹴りだし、一瞬でユウの懐に入る。だが、瞬間に、ユウの眼は赤く光りだし、アルスをとらえる。

「ぐっ!!」

アルスは、一步も、いや、身動き一つできない。何か縛られているみたいに。

「言つたる？ おれはユウみたいに優しくない。 だから、殺し合いを引き延ばすこともしねえ。 ……まあ、あっけなかつたがな。」

ユウは右手を構える。

「ああ、そうそう。 唯ちゃん、だっけか？ もうちょい離れてないと、危ないぜえ？」

魔王は唯が気になったのか、唯に下がれと、そういった。

唯は名前を呼ばれると、どこかなつかしく、落ち着くようなかんじ

だった。

「俺が倒れたら……まあ、遊をよろしく頼むわあ。」

ニコツと微笑みかけるユウ。魔王はやさしく、そして、どこか名残惜しそうな声で唯に言うと、唯は不思議そうに、

「……貴方はいったい……。」

とつぶやいた。魔王はその言葉が聞こえていたが、返答はせず、ただ、

「……またな。ユーイ」

「!?!」

といった。

そして、また戦闘の目にもどり、

「じゃあなあ。英雄。　　あなたは、末代まで語られる、最高の男だったぜえ。」

そういうと、ユウは一気に、オーラを爆発させる。

あたり一面が消し飛び、耳が張り裂けそうな爆発音をあげた。

……そこには、遊ただ一人だけが倒れており、男の姿も、魔王の姿も消えていた。

……横にあった建物が消し飛ぶという爪痕を残して。

散る聖騎士、アルスの最期。（後書き）

ついに……戦闘が終わった!!!

いやー、中々、大変でした。下書きが消えるというハプニングが起こりまして。かなりのアドリブが（TOT）ノ

でも、良いシーンになったのではないかと思います。

しかし……ユウは強いなあ（笑）自分で作ったキャラですが、私の想像のはるか上をいつている気がします（。。。）

このユウという主人公、見てわかるとおり、奥が深いキャラクターです。

まだまだ秘密が多いですし、時には、変態なんじゃないかと思うところも？

まあ、とりあえず、ユウは置いて（笑）

アルスにいきましょうか。このキャラクター、実はアドリブでつけた名前を使用していますw w 下書きでは、ひたすらに、アサシン、と呼ばれていました。

とまあ、可愛いそうなキャラなのですが、初めて、正義の為に闘った男、ですね。

ユウは、正義のためというよりは巻き込まれているし、不知火は……ネタばれなので言えませんが、正義感の為ではありません。

若いころに励まされた唯の為、自分を信頼してくれた国の為にと、
何ともかつこいいキャラです。

とまあ、こんなところですかね。　いずれは、キャラクター投票
で、アルスが上位に入ること期待しています（＾o＾）

それでは皆さん、ごきげんよう。

星の輝きは……。動き出す影。(前書き)

闘いは終わった。

だが、闘いは終わらない。

終わりは始まりなのだから。

星の輝きは……。動き出す影。

「!?!」

気が付くと知らない部屋のベッドで寝かされていた。どこか可愛らしい部屋ではあるが……。いや、待て。俺は唯を護れたのか!?! 奴にとどめをさそうとした所までは覚えているんだが……

「遊さん!?!」

「おわっ!?!」

唯がいきなり飛びついてきた。……どうやら、無事だったようだ。

「ひとまず、無事でよかったが、……とりあえず重いんだが。」

いや、男としてはありがたい所だろう。いい匂いだってするが、……流石にそこまで変態じゃないぞ?俺は。

「……女の子に重い禁句です」

ポカポカと殴られる。体が小さいせいかなり痛くない。

唯から、出来事の一部始終を聞いた。白銀で長髪の少年、魔王。

まるで全てをしりつくしたかのような言動、それは俺の考えさえお見通しだった。

なら、あの時聴こえた声は……。

「まあ、とりあえず一件落着だ。んで、これから唯はどうすんだ？ 暗黒騎士側の領地にいくのか？」

暗黒騎士の領地は……北・南アメリカ大陸か。

行くなら早い方がいいし、ここにいるより安全だろう。

「いえ、私は貴方の傍にすることにしました。」

「……はい？」

「だから、このままここで生活することにしたんです。」

……このままここに？ 自分の命が狙われたっていうのに？……全く、女の子の考えは解らん。

「何か理由があんのか？」

それしか考えられないのだが……。

「特には。ただ、ここで確かめたいことがあるんです。」

確かめたいこと？ ……聖騎士（ユーラシア・アフリカ・日本を除くアジア大陸）の暗殺者が中立側（日本）まで来たんだ。それ相応の理由があるはずなのだろうが……ここで聞くのは無粋だろうか。

「それと、遊さん。」

「？」

「あの、これからは遊兄さんって呼んでもいいでしょうか？」

「……？ いや、えーと。」

「……実は、あなたは生き別れになった兄さんなんです。つとか、そういう設定か？」

「いえ、そうではなくて。昔、貴方と似た人がいて、その人もユウ兄さんって呼んでたんです。」

「うーん（ー）、そんなこといきなり言われてもなあ……って感じなんだが。」

「……まあ、好きによんでくれ。」

「しょうがない……よな？ 本人が呼びたいって言うてるんだし、それに……どこか懐かしさを感じずにいられない。……？ なら、昔、ユウ兄さんって呼ばれてたのは俺だっていうのか？……」

ズキッ ……！！

「……やめよう。また頭が痛みました。」

「……んじゃ、そろそろ俺は帰させてもらっわ。世話になったな。」

「ベッドから起き上がり、帰ろうかと思った。」

「時刻は既に、24時をまわったところ。補導されてもおかしくない時間だったが。」

「あの、ユウ兄さん。もし良ければ……うちに泊まっていきませんか？」

が、唯の提案で、俺はベッドで体を起したまま、止まってしまつて……は？

「いやいや、ちょっと待て。流石にそれは……」

いや、男としてはうれしいよ？　けど……いくらなんでも……まずくないか？

「でも、今外に出れば警察に事情聴取かもしれないし、それにそんな体じゃ動く事さえ難しいはずです。」

……確かに。外はパトカーのサイレンの音が鳴り響いていて、おそらく警察で溢れてるはずだし。それに俺も家まで帰れる自信は無かった。

「了解した。……が、お前はそれでいいのか？　一応、俺も男だぞ？」

「私は大丈夫です。それに、ユウ兄さんがそんなことするとは思えませんしね。」

自信満々の笑みで、唯はそう答えた。……これはいまさら後には引けねえか。　ってか、めっちゃ信頼されてんな、俺。　むしろ、草食系に見えてるのか？

「なら、せめて俺は地べたで寝よう。」

まあ、怪我人とはいえ当然だろう。　人の家でぬけぬけと、ベッドで寝られるほど、俺は無粋じゃない。

「いえ、兄さんはベッドで寝てください。私は布団を敷くので。」
再び、起き上がろうとするが、またもや唯に制されてしまう。

「いや、しかし。」

「……いいんですか？ 私、風紀委員入ろうと思ってたのにな。」
私が入ん無かったら、京子先輩、怒るだろうなあ。」

唯は意地悪そうに微笑みながら、脅しをかけてくる。　そういや、風紀委員を二人、連れてこいだの言ってたな。
……今日、風紀委員に入れられる事を聞かされたあと、不知火はこんな事を言っていた。

「立花、あんたこの一週間で、風紀委員候補生を、二人連れてきなさい。……さもなくば。」

……続きは聞きたくねえ　連れていかなかったら、……殺される。
流石に、あいつに殺されるのは勘弁だなあ。……ドSだし。　きつと、「楽には死なさないわww」
とか言つて、玩具のように壊される……ここは従った方がましか。

「わかったよ。」

無駄な抵抗をやめ、俺はそのままベッドに横たわった。

〇〇〇〇

その後、唯が寝たのを確認して、俺は時空移動能力をつかい、唯を布団からベッドに移動させ、ベッドのうえで寝かせてやった。無論、俺は寝ないでベランダで星を見ていた。

「……………」

星は良い。夜の間はいつまでも輝き、俺を魅了する。星たちは無数に輝き、それぞれが光を放ち、共鳴しあう。まるで人間たちが共存しているかのようにな。…………俺にはできないようなことだな。

……………?

前にもこんな話を誰かと…………

「ね——ユウク——」

ズキツ　　！！

またか。　　まあ、いい。

今は星を見られるだけで…………。

〇〇〇〇

同時刻。　　爆発現場では警察たちが入念に捜査をしていたが、何の手がかりもつかめず、捜査は打ち切りとなった。

若手の警官は、初捜査で張り切っていたため、他の警官が帰ったあとも、現場に残っていた。

すると、現場付近で人影を見つけた。

「おい！！そこで何をしている！！」

男は、爆心地と思われる位置に立っており、何をするわけでもなく、ただ立ち尽くしていた。

「おい、署まで来てもらおう」

警官が近寄った瞬間だった。警官は、消えた。

男は懐から通信機と思われるものを取り出す。

「……アルスは失敗したようです。」

男はそう告げる。

「……ああ、わかっている。だが、唯は放っておいて構わないだろう。問題はやつだ。」

通信機から声が聞こえる。

「魔王、ですね。」

「……遠からずも近からず、といったところか。まあ、いい。駒はこちらで手配しておく。お前は今まで通りに動け。」

「はっ。」

「それと……。例の娘はどうなっているか？」

例の娘？ 駒？

「まだ使い物になりませんが、いずれは私の指示通り、動くようになるかと。」

「ならばいい。期待している。」

そして、男は闇へと消える。警察は、警官が一人、行方不明になったことを公にはしなかったという。

星の輝きは……。動き出す影。(後書き)

こんにちは、シンです。

今回は……長かったです(汗)

読まれた方もそう感じたかと、お疲れ様です。

ですが今回、少しは謎が解けたところがあるかと思えます。

まあ、どこがとは言えませんがwww

でも、その分、解らない部分も多く出てきますよね。最後の警

官を消した男とか。これは……多分、序章ではわからない部分

ですね(汗)

まあ、書くのを我慢しててください。僕もがんばります。

そして、今、女の子の服で悩んでいるところが少々。……いや、

変な意味じゃないですよ!？ 別に、妄想しながらウハウハす

るわけじゃないですよ!？

ただ、どんな服を着せたらいいかわかなくて……こんな服がいい

よって言うのがあったら、メッセージをお願いします。もし

かすると、その服を着て、キャラクターが登場するかも!？

ではごきげんよう。

その後の風紀委員会

……次の日の放課後……

「今日から風紀委員になります、一年の梶原 唯です。 お願いします。」

ぺこっとお辞儀をする唯。

……唯は俺に言ったように、風紀委員に入った。

「歓迎するわ。唯っち。 私は不知火 京子。 京子先輩とでも呼んでくれて構わないわ。」

「私は、新山 美由です。 よろしくね唯ちゃん。」

……!?!? ちょっと待て。

「新山……お前、うまく話せてるじゃないか!?! どうしたんだ!?!」

ビックリだ!! 昨日まであれだけ噛み噛みだったのに……。

「あっ、いや、しょの。」

……やっぱり訂正。 噛み噛みだ。 むしろこっちの方が新山らしい。

「立花、美由っちは男の子と話すのに慣れてないのよ。」

……俺と話す時だけってか。

「あの、ごめんなしゃい。」

「……まあ、その方が新山らしいさ。」

まあ、ドジだしな。

「それよりも……あんたが本当に連れて来るとはねえ……まあ、でも、あと一人足りないけどねえ。」

悪魔のように微笑む不知火。

「……不知火さん、その笑顔が怖えーっす。」

こうして、風紀委員は四人に増え、新風紀委員発足まで、着々と進んでいた。

美しき剣士・清水 冷香（前書き）

唯を助けてから三日。一向に5人目の風紀委員が見つけれない遊。

身の危険を感じつつも、その背後に影が迫りつつあった。

美しき剣士・清水 冷香

あれから三日がたった。が、一向に五人目の風紀委員が見つからず、俺は生命の危機を感じていた。

……仕方ねえ。最終手段だな。ずばり……陽介しかいねえ。

まあ、ノリにのってくれたり、ギャグ言ったり、不真面目に見えるが、普段は真面目な奴だ。困ってる人を見捨てられなかったり、俺が助けを求めるといつも助けてくれるし。

俺は登校し、教室で陽介を待ったのだが……、その日、陽介は学校に来なかった。

理由は病気だとか。……んー、何かひっかかるなあ。熱だすようなやつじゃねえし……。

……昼休み……

「はあ〜。」

今日は予算オーバーのため、飯も食わず、屋上へ。

大体の生徒は教室で友達と仲良くご飯を食べているため、屋上はすつからかん。つまり、独り占め出来るという訳だ。

しかし、困った。

未だ、解決策が見当たらない。

「……やっぱ、陽介しかねえよなあ〜。」

堤防から町を見下ろし、どうしようもなく、溜息をつく。

……まあ、思い詰めても仕方ないな。寝るか。
俺はそんなことを思いながら、寝っ転がる。

「……ん？」

人の気配を感じ、目を開けると、俺一人かと思っていた屋上にもう一人、生徒が立っていた。

まあ、特に気にすることは無いと思ったんだが、こつちを見ている。瞬きすることなくずっと。……人にみられていたら寝れる訳が無い。

つか、どっかのホラー映画かなにかか？ おい。

「……俺に何か用か？」

少しずつ近づいてくる。この学校の女子生徒のようだ。

「貴方が……魔王ですね。」

……はあく。最近、この質問が多いな。魔王、魔王、魔王。この一週間で、いったいどれだけ聞いたことか……。

「……そうかもしれないな。だとしたら、何だっというんだ？」

もう、うんざりだ。寝たい時にも眠れず、休む時間さえない。

「……試させてもらいましょう。」

その娘は、いきなり……刀を取り出し、おれにむけた。
ピュッ。

横に一閃。

俺は間一髪の所で避けた。

「っおお！？ 危ねえ……」

「なるほど。なかなかですね。」

「いやいや！、こっちは殺されそうになったんだが！？ なかなか
って……。」

「……今は屋上で闇討ち、って方法が流行ってんのか？」

この間も、誰かさんにいきなり殺されそうになったな。
全く、とんでもねえな。

「いいでしょう。合格です。 貴方には、私と一緒に来てもらいま
しょう。」

はい？ かわいい女の子に誘われれば、確かについていきたくも
なるが……。

「いや、ちょっとまって！？ お母さんに、知らない人にはついて
いくなと」

「何の話をしてるんですか！？ ネットが古いんですよ……！」

なに？ 通じなかったか？ まさか！？

「……誘拐犯か何かか！？ まさか……変態の人か！！ 俺になに
する気だ！？」

「なっ！？何を言っているんですか！？貴方は！！私は真剣な話をしてるんです！！！」

真つ赤に頬を染めながら、怒鳴る少女。

……からかいがいのあるやつだ。態度、反応からみて、俺を殺すのが目的じゃないらしい。

「……んで、真剣な話って何だ？変態さん。」

「だから、変態さんじゃないと言っているんです。……まあ、いいです。私は清水 怜香。一年です。」

……年下か。長くて、綺麗な黒髪、おれくらいの長身ですらつとした体型、おしとやかな雰囲気、まさに大和撫子、とっていい感じから年上かと思っただが……

「……俺は立花 遊。君の言ったように、魔王らしいな。」

あまり断言はできない。なぜなら納得がいかないから。……ガキみたいな理由だな。

「さて、それでは本題に移りましょう。私について来てください。

「話っているのは？」

「向かいながらはなっ！？」

その時、薙刀のようなものが清水を一闪。清水は察知したのか、ぎりぎりの所で横跳びし、攻撃を避けた。

「へえ、よくよけたじゃない。清水さん。」

……「この聞き覚えのある声は！？」

妹救出作戦

「……不知火、お前は何やってんだよ」

声の正体は、この凜々しく薙刀を構えている少女、不知火 京子だった。

……ってか、後輩に後ろから切りかかるか？普通。……いや、前
言撤回。この学校自体普通じゃなかったな。

「……おや、不知火先輩じゃないですか。一体、どうされたんですか？ 相当、ご機嫌斜めなようですが？」

？ 知り合いか？こいつら。 ……ってか、危ない二人が屋上に揃っちゃったんですか！？

「陽介を助けに行くんでしょ？ 私も行くわ」

陽介？

「……私はまだ、何も言っていないませんが？」

「立花を誘ったことで、話は全部理解できたわよ。 ……それに、あんたが動く理由がその件についてしかあり得ないし」

「……よろしいのですか？ 互いに殺しあうかもしれないですよ？」

「覚悟なんて、二年前のあの日からできてるわよ。」

??????

「あの〜？お二方。わたくし、まるでお話がわかっていないんですが？ とゆうか、二人は知り合いですかい？」

「ええ。まあ、腐れ縁とゆうやつですね。……言い忘れてましたが、私達は暗黒騎士の人間です」

……えっ？ ……いや、思い当たる節もあるな。魔王ってことも知ってたしな。

「……マジか？」

清水は納得出来るが、不知火もか！？ ……通りで。

「仲が悪いのは、能力関係でもありませんね。私は水、不知火先輩は……まあ、解りますよね？」

……なるほどね。人間関係にしても、火と水は相容れないってことか。

「……まあ、無駄話はこちらまでにして、行きましようか。不知火先輩も来てください。」

不知火は仕方ない、というような顔で頷いた。

「ちょっと待て。俺はまだ、手伝うとは言っていない」

「……陽介さんが大変なのですよ？」

少々、怖い顔で反応した。陽介が、ね……それも、ついていかなくちや教えてくれそうにないが……。

「まあ、そう怒りなさんな。あんたが風紀委員に入ってさえくれれば手伝うさ。」

……
驚いた顔で俺を見ている。まあ、俺だってわかってるさ。だけど、入るか入らないかで、俺の生死が分かれるんだ。

「そんなことですか。まあ、いいでしょう。了解です。」

「ちよつと!! 私はまだ、了解してなつむぐつ!!」

俺は、清水の風紀委員入りを否定しようとした不知火の口をふさいだ。

ここで否定されたら、俺の未来は……考えるだけで怖い。

「……あんた、覚えておきなさいよ」

……笑顔が怖いです不知火さん。

……ビルの廃墟

あれからどれほど歩いただろうか？ 時刻はまだ二時ほど。日

はまだ落ちる気配さえない。

ようやくついたかと思うと、そこはビルの廃墟。

なかは薄暗く、

ガラスだの石だのが散乱している有様だった。

「ここでもいいでしょう。」

ビルの廃墟に入った所で、清水は立ち止まった。

「……本題とやらを話してくれ。」

「そう急がなくても大丈夫ですよ。行動を開始するのは夜ですからね。」

「それじゃ、私達の事から話しましょうか。」

そういって、清水は話を切り出した。

「まず、先程も申した通り、私達は暗黒騎士軍の將軍クラスです。ジェネラルつまり、貴方の部下にあたると言っても過言ではありませんね。」

「……そのわりには、さっき、躊躇いもなく殺されそうになったんだが!？」

「まあ、今のところ貴方は王位についてないので、階級的には私達と同格にあたるのでしょうかね。」

「……こうやって事実を知るものから話を聞くと、ホントに自分が魔王であることに違和感を感じなくなってくるな。」

「……んで、その將軍様達が何の用なんだ?」

二人が真剣な顔つきになる。

「……では単刀直入に言いましょう。天草 陽介の妹救出、及び誘拐犯の抹殺です。」

??????

「えっと、わりい。解らないことだらけで、質問してもいいか？」

「ええ。どうぞ。」

「陽介に妹なんていたのか？」

高校からの付き合いだが、初めて聞いたぞ。

「ええ。一歳年下の妹がね。貴方が知らないのも無理はありません。彼は極力、自分の情報が漏れることを避けていましたからね。」

暗黒騎士最高司令官

全く。あいつ、妹萌えだの言っただくせに……本当は妹いるんじゃないか。

「んじゃ二つ目、あいつの妹を救った所でお前らになんの得があるんだ？」

確かに、傍から見れば素晴らしい行為なんだろうが……まず、普通に考えて、なんの得もなしに人一人助けようとはしないはずだ。ましてや、将軍様が動き出してるんだからな。

「……私の親友だから……という事では納得しないでしょうね。嘘では無いのですが、質問の回答としては不十分でしょうしね。」

個人的感情で動くなら、俺を誘ったり、冷静でいられるはずはない。別に嘘とは言い切れないが、俺の知りたくないところではない。

「……ああ。まあ、軍からの命令ならあまり話せ無いんだろ？別に話してくれなくてもいい。」

「いいえ。貴方には知っておいてもらっても大丈夫でしょう。魔王ですしね。」

……それもそうか。

「あの娘を救って、私達になんの得がある？……でしたね。それは、あの娘が最高司令官の妹だからですよ。」

……
ちよつとまで。最高司令官の妹？ さつきは陽介の妹と言つたよな？……んじゃ、まさか？

「天草 陽介。暗黒騎士の最高司令官ですよ。」

……冗談……つて空気じゃないな。

「……なるほどな。それは動かざるをえないわけだ。ただ、誘拐犯と言つたな。」

「ええ。」

最高司令官の妹を誘拐か……確かにドラマとかではありがちだ。権力の高い人間の大切な人を誘拐し、金や物を奪う。……だが、それはあくまでもドラマの話だ。

最高司令官の妹が一人で外を出歩いたりして、周りが許すはずが無い。それに、暗黒騎士の国に住んでいるはずならば、周りは味方の者ばかりだろう。聖騎士側が誘拐なんか出来るわけは無いはずなんだが……

「……まさか、聖騎士ではない？」

「……勤が良いすぎるというのめかんがえものですね。その通りですよ。ただ、その前に……貴方は、どんなことがあるつと陽介さんを裏切らないと誓えますか？」

……？ いきなり何なんだ？

「……それはどういう」

「他意はありません。ずっと親友でいられるのかと聞いているんです。例え、実父と殺しあうことになるうともね。」

「……どうい事だ!!」

「俺の……父親？」

記憶が無い。正確には思い出せない。声も、顔も。

「その前に誓いなさい!! 魔王の息子。……でなければ、貴方を殺さなくてはならない。」

……。おれが陽介を裏切る？

「……愚問だな。俺は陽介を裏切ったりしない。その時は……俺を殺すなり、なんなりしてくれ。」

アイツは……そう、たった一人の親友なんだ。どんなことがあるかと俺は……裏切らない!!

自分の感情を、あらわにした瞬間だった。すると、発動させてもないオーラが込み上げてきた。

「……その決意に、嘘、偽りは無いようですね。いいでしょう。知って貰いましょうか。……暗黒騎士の現状を」

意思が通じたのか、清水は理解してくれた。

「今、暗黒騎士は二つの勢力に別れています。」

「二つ?」

「ええ。一つは当たり前ですが、正規の魔王勢力。もうひとつは、我々の勢力です。」

「……どういうことなんだ？」

「一般的に言えば、我々は革命軍のようなものです。私や不知火先輩、あと、先日、唯も加わりました。」

「……そうになりたいきさつがあるんだろう?」

元からそうなってるわけではないしな。

「ええ。昔は魔王様の下、皆平等に、優しく、助け合いながら生活していました。」

「……まるで、今の日本が求めているような暮らしだな。」

「いつまでも続くと思っていました。争いが無く、平和な日常が。」

「……本当にそんな所があるなら、俺も行きたいものだ。昼寝して、飯喰って、また昼寝して……」

「でも、ある日を境に、その日常は終わりを迎えました。それは十年前」

十年前……記憶のあるやつなら、ここで、「俺は、くしてたなあ。」

とか言うんだろうが、生憎、俺には記憶がない。

「その日から、魔王様はお人が変わったように、重税にしたり、冤罪をかけられた者には、問答無用に死を与えたり……その他諸々も含め、暗黒騎士は変わってしまいました。今まで助け合っていた者たちも、お金や食料を奪い合い、貧富の差まで出来てしまった程です」

……。いくら助け合い、仲良く生きていようとも、結局、追い詰められれば生きるためになんでもする。それは天使も魔族も人間も、変わらないようだな。

「私達も手を尽くしました。けど、魔王様は方針を変えることなく、……。だから、……私と不知火先輩と陽介さんは革命軍を結成したんです。」

なるほどな。さすがに見てられなくなつたと。

「そうねえ、私達二人が士官してから三年後につくつたから……結成二年目になるのかしらね。」

不知火は、清水が話しくそうにしているのをみて、俺に説明してくれた。

実はこの二人、仲がいいのか？

不知火から話を聞かせてもらった。
とりあえず、革命軍のことは、革命軍のもの以外、だれも知らないということ。

そしてどうやら、この二人は十年前は士官していなかったらしい。今年で革命軍をつくって二年目、士官したのがその三年前だからな。なぜ、二人や陽介が高い位にいるのかというと、親から引き継いだらしい。……暗黒騎士の社会も、人間とさほど変わりないようだ。

「だが、革命軍なんだろう？ 本国にいないか？」

暗黒騎士の革命軍が、人間側の日本にいてなんて不思議で仕方ない。

「そうね。じゃあ、逆に聞くけど、たった三人で暗黒騎士を変えられると思う？」

……成る程な。要するに、今は仲間を増やし、戦うための戦力を増強している時期らしい。

「……成る程な。今は仲間を増やし、戦いのための力を蓄えている。ということか。んで、中立の人間を仲間に行っていると。」

「ええ。そういうことです。」

「んで、誘拐したのは魔王だと、……そういうことか？」

……だが、なんかおかしくないか？ いまいち話が噛み合わない。この二人も陽介も魔王に士官してる。だが、革命軍。んで、密かに仲間を増やし、戦いにそなえている。が、陽介の妹が魔王にさらわれた。普通に考えれば、反乱がばれた……とかんがえるが。

作戦決行

「……正確に言えば、今回はあまり、あなたの父親は関係ありません。」

？

「陽介は、軍での位が最高。それを羨む者は多くいるということ。つまり、たった十いくつの少年がその位についているということに納得する人間は多くないってことよ。」

「……大体理解できてきた。陽介は妹を人質のされて動けない。むしろ、誘拐側に操られている。だから、魔王は、將軍クラスのお前らにこの一件を任せたって訳か？」

……。

沈黙の間が続く。 何故？

「いいえ。これは私達、独断の行動です。」

……なんだと？

「何故だ？ 普通なら、魔王が問題解決の為にづくぐものだろ？」

「だから……普通じゃないのよ。」

「逆に魔王様は、「私の側近は、より強ければより良い。むしろ、この戦いに打ち勝った者こそ最高司令官に相応しいだろう」とおっしゃられておりました」

……それほどまでにか。
いまだ、俺の実父とは認めていないが……もしそうなら、こっちから願ひ下げだな。

普通じゃないどころか、王としてはまるで最悪だな。
まるで戦いのことにしか頭がない。 そんな感じだ。

「さて、そろそろ作戦の話を進めましょう。」

「ああ、頼む。」

「まず、決行は8時。この時間に私達は、館に乗り込みます。」

……どうやら、監禁場所はどこかの館らしい。

「館内には、多くの兵士が見回っているはず。なので……不知火先輩には、大規模な戦闘をお願いしたいのですが……。」

「……いいわ。その方が単純で解りやすいしね。」

「その間に、私と遊さんで救出です。……大丈夫ですか？」

……まあ、確かにシンプルな作戦だな。しかし。

「了解した。が、最後に一つだけ質問していいか？」

まだ、ひっかかることがある。

「何ですか？」

「見回つていると言ったな？ それは何故だ？」

さつき聞いたが、陽介は館内にいるらしい。だが、それなら見回ることなどせず、見張るだけでいいはずだ。

「……実は、あらかじめ不知火先輩が今日、館に乗り込むという情報を流しておきました。つまり、警備は厳重ということですよ。」

……成る程な。シンプル過ぎる程にシンプルだな。

「了解。」

「……では、作戦開始と行きましようか。」

……館前……

現在七時五十八分。あたりは真つ暗だ。

……立派な館だ。これ、忍び込むのは骨が折れそうだな。

清水が不知火に合図を送ると、不知火は館に飛び込み、館前の大きな庭で立ち往生した。

「いたぞ！！ 不知火だ！！」

「さあ、行きましよう。遊さん。」

不知火が注意を引いているうちに館内に入る。とりあえず、第一関門突破だな。

……館前……

敵は百人程だが、所詮は兵士。 といえど、全員能力者ではある。

「お前も倒せば、將軍になれるってわけだ。」

兵士は殺気立つ。

だが、不知火は微動だにしない。

「いいでしょう。 来なさい。 炎槍グランオルグの鎧にしてあげる。」

……館内……

「このホールを下に行けば、牢獄です。」

……何かおかしい。 館内がやけに静かだ。 いくら、外で敵の目を引いているとはいえ、この静けさはおかしい。 そう思つて、ホールに足を踏み入れると、

「……来ちまつたか。」

一人、立ち尽くす青年がいた。

「……陽介。」

陽介は黒い服、黒いマントを羽織い、手には大鎌をもち、黒いオーラを放っていた。

「お前、ホントに暗黒騎士だったんだな。」

「……ああ。きいちゃったんだな。あまり、知られたくはなかつたんだがな。」

妹のことも、暗黒騎士のことも、革命のことも、……全部本当みただいな。

婚約者

「陽介さん!! 今、外では不知火さんが兵士達と戦ってるんですよ!？」 婚約者が助けなくていいんですか!？」

「……えっ？」

ちよつと待て。 会話の流れから察するに。

「……不知火の婚約者〃陽介

ああ、なるほどねえ。」

「……。」

「う、う、う、

「婚約者〜!？」

不知火と陽介がか!？ 不知火と陽介がか!？ 冗談もいいところなんだが。

「……と考えるとだ。

「陽介。」

「なんだ？」

「……お前が受けて、不知火が攻めか？」

いや、普通すぎるか。 実は不知火はMで、お前がSの方か!？」

「何の話をしてるんですか!？」

顔を真っ赤にしている清水。 ……なかなかいいリアクションだ。

「遊、それは違うな。」

「ほづ。どう違うというのだ？」

「……俺らに受けも攻めもない。ただひたすらに、京子にボコボコにされるだけだ！！」

あの空間で、Mを名乗れるやつがいたとするなら……そいつは勇者だな」

ゲラゲラといったものように笑い合う二人。……何も変わってない。

いつも通りの陽介だ。立場が変わろうと、親友という大前提に変わりはない

「……だが、婚約など昔の話だ。今は、妹を、鮮せんを助けることが重要だ。」

表情を変えず、ただ、黙々と陽介は答えた。

「だからって……」

清水は悲しそうな顔をする。……見るに堪えないな。

「……清水、お前は陽介の妹を助けに行け。」

「……でも」

俺の指示に迷いを感じていた清水だったが、親友のことが気になったのだらう。少しして、清水は地下へと向かった。

「行かせてよかったのか？ お前は奴らに、ここを通すな、と言われたんじゃないのか？」

「……俺の視界に、清水は一度も入っていない。清水という存在自体ここにいた、という認識が俺にはなかった。」

なるほどな。 どおりで清水と会話を交わさないと思ったが、そういうことだったか。

「だが、まあ、お前が悪魔側の人間だったとはな。 驚いたよ。」

「失望、しただろ？ 親友だったお前を騙していたんだ。」

「……別に。隠し事の二つや三つ、誰にだってあるだろ。 お前が正しいと思っただら、それは正しいのさ。」

「だけど、今から俺は！！」

「言うなよ、……実の妹を助けるためだろ？ 俺を殺さなきゃ、妹さんが死んじまうんだろ？」

そう。しょうがない。 俺を殺さずに、妹も助けるなんて、虫が良すぎるんだ。 ましてや、それを一人でどうにかすることなど理想論でしかない。

なら、俺は……

「……だが、俺も死ぬわけにはいかない。 陽介、本気でこい。」

だから、俺は、時間を稼ぐ。 一人でなら助けられないかもしれぬ。 けど、今は清水がいる。 俺はアイツを信じる。……柄じゃないけどな。

「やるしかないみたいだな。」

陽介は大鎌を構える。俺もそれに呼応して、ディバインレリックとオーラをだす。

!?

俺は咄嗟に右腕を抑える。あの日、唯を助けた日から右腕がおかしい。独りでに動き出すというか、意志があるみたいだ。

「……どうした？ 右腕を抑えたりして。」

陽介は俺の心配をする。全く、優しいやつだ。

「今は敵同士だろ？ 敵の心配なんかするもんじゃない。」

「……そうだな。」

俺は、右腕をオーラで無理矢理におさえこみ、ディバインレリックを発動させた。

信じるもの

……牢獄……

「……ちっ。こんなところの見張りなんてな。ついてないぜ。」

牢獄には兵士が一人、鮮の見張りについていた。

「おっそうだ。いいこと思いついたぜ。おい、可愛い子ちゃん。せっかく、牢獄の鍵を持ってるんだ。楽しいことしようぜ。」

そういつて、男は鍵を開けて、中に入ってくる。だが、鮮は動かない。声もあげない。抵抗さえしない。

兄が助けしてくれると信じているのだろう。あれ程、頼れる兄が何処にいるのか。純粹な少女にとっては、彼こそが正義なのだ。それは、聖騎士でも、暗黒騎士でもなく、彼でなくてはならない。……徐々に男が寄って来る。もう終わりだと、眼を閉じた時、バツツと音がした。不意に眼を開けると、その男は倒れていた。

「鮮!!」

……やはり、訂正。彼だけではなく、彼女も正義だ。清水 怜香。私のかけがえのない、たった一人の親友。怜香は私に抱きついて来る。

「鮮!! よかった、本当によかった!!」

「怜香、ありがとう。……私……。」

「いいんです、鮮。何も言わないで。さあ、ここから早く。」

……館前……

「さあ！！ かかってきなさい！！」

私が一喝すると、一斉に動き出す。だが、その動きは単調で遅い。

当然、不知火相手には齒が立たない。

「さて、もう10人も切っちゃったわよ？ どうするのかしら？」

……ホール……

「そついや、お前とこうやって対峙したことはなかったな、遊」

「……そつだったな」

「そつ考えるとさ……そろそろ白黒はつきりつけとくか？」

おそらく、どっちが喧嘩が強いか……ということだろう。

そついや、こいつとは互いに背中を合わせて、良く町中の奴と喧嘩したものだ。

……ほとんど、相手から吹っ掛けられたんだがな。

「……めんどくせえ御託はいいから早く来い。」

「んじゃ、遠慮なく。……ブラックサイト」

見えない。
ヒュッ！！

空気が切れる音がする。 と同時に、俺の左腕からは赤い血が滑り落ちてくる。

「どうした？遊。 今のは避けきれない攻撃でも無いだろ？ それでも、京子や唯を殺そうとした者に勝った者の実力か」

「……俺は一度だって、勝負に勝ったことはねえよ。」
わざとにせよ、不知火に負けたし、暗殺者倒したときは意識無かつたしな。

「……だが、その出血量じゃあ、ホントに死んじまうぞ。」
確かに。 そろそろまずいと、俺の体も告げている。
どれほどの時間が経つのだろうか。
俺は防戦一方で、体はズタボロ。
数十か所に傷を負っており、体からは赤い血が滴り落ち、床は俺の血で赤く染まっている。

黒い刻印

ホールは先程まで、シャンデリアの明かりで明るかったが、陽介の能力でそこは闇と化した。

ブラックサイト。辺りを暗くし、視界を奪う能力。これにより、俺は陽介の姿が見えず、防戦一方となっている。

「だが、流石だな、遊。眼ではなく、空気の流れや、俺の足音から攻撃を予測し、回避するとはな。俺もなるべく足音を殺しているんだがな」

……気づかれてたか。まあ、空気の流れや音が聞こえるだけマシだ。

五感全て奪われていたら……死んでいたな。ただ、完璧に避けられていた訳じゃない。さっきから、右腕を抑えるためにほぼ100%と言っていいほどのオーラをまわしている。つまり、今の俺は無能力者といっていい程の実力だ。

「……せめて最後は、お互いの姿が見える状態で……」

陽介は、能力を解除したのか、辺りはいきなり明るくなった。

「……陽介、手加減はいらないと」

「手加減じゃない。俺なりのけじめだ。」

……まあ、陽介なりに俺にチャンスをくれたみたいだが……。相変わらず、甘いやつだ。だからこそ、優しさを捨て切れてないんだろうな。

だがまあ、俺も俺だ。　チャンスくれた陽介に、反撃できるかどうかって考えたら……。

まあ、無理だろうな。　ダメージで、身体は立ってるのがやっとだし、何よりオーラを右腕に全て注ぎ込んでるってのがつらい。

「早く剣を取れ、遊。」

そうしたいのは山々だがな。　剣を空間から出すことさえまんならない。　その時、

「（俺を抑え込むとはなあ、見込通りだぜえ、遊。　……良いぜえ。もつとその力を見せてくれよお）」

なんだ！？　右手が熱い！！　頭に誰かの声が！！

「（なんだよ。殺らねえのか？　なら、俺と変われよ。　一思いに殺してやるからよお）」

俺が……陽介を？殺す？

「（ああ、じゃなきゃ、お前が死ぬんだぜえ？　友達も何も、関係ねえ。）」

俺が死ぬ？　……だが、

「（有り得……ない！！　俺は約束したんだ！！　何があっても陽介を裏切らないって。」

友達は護るって！！）」

「（けど、そんな甘っちょろいこと言って生きていける世界じゃないぜえ？　そんなこと言ってるって、どっちも死んじま）」

「（……お前、ちょっと黙れ。　殺すぞ？）」

「（！？　くあっはっはっは。　やりやあできるじゃねえかよ、遊。　それだよ、その感じ。」

これは期待がでかいぜえ。　んじゃ、俺は、高みの見物というか。

今はな。　ただ、この先迷うようだったら……覚悟しな。（

」

！？

なんだ？　頭に声が聞こえてきたと思ったら急に右腕が熱くなった。

！？　右腕に黒い印が浮かび上がっている。

「なんだこれは！？」

何と言ったらいいのか、薔薇のようで薔薇でないような、刃物の先端が四つ、四方に伸びているようでいないような。

……一番解りやすいのはチンピラの刺青、個人的感情で表わすと、

【悪魔のタトゥー】、といったところか。

ビックリした。いや、ビックリしないほうがおかしい。いきなり、右腕に黒い印が浮き上がってきたのだ。そしてなにより、陽介がつけた傷も全てが消え去り、俺は平常、いや、最高の体の状態になっている。

「そいつは……」

陽介は何か知っているようだった。

「陽介さん、戦うのをやめてください」

おかしなタイミングで、声をあげたのは、待ち望んでいた清水の声だった。

「兄さん!」

少女は涙を流しながら、陽介に走り寄った。

「鮮」

感動の再会。二人は抱き合いながら、喜びをかみしめ合っている。

「……鮮。ホントによかった。無事で」

「兄さん……」

「清水、良くやったな。これで一件落着いてか？」

「そうですね。立花先輩もお疲れ様でした」

「……うーん、完璧に場違いになってるんだが……」

「……水を差すようで、済まないが……早く脱出しないか？」

やり残したこと

「ああ、すまない。」

「とりあえず、俺が空間を歪めたら、そこから中に入れ。そうすりゃ、一気に館の外……つまり、不知火を助けに行ける。」

俺はオーラを集中させ、空間を歪める。

外には不知火が一人で戦っているのだ。早く助けにいかなければな。ただでさえ、陽介は婚約者なのだからな。

「解りました。」

「はい。」

清水、鮮、共に頷き空間の中へとはいっていく。

「……陽介、早くしろ。」

陽介は未だ俺の作りだしたブラックホール？のようなものには入らず、俺のことを心配そうに見つめている。

「遊。お前は？」

「……まだ、ここでやることがあってな」

「やること？」

「ああ、重要なことだ。」

お前は早く不知火を助けに行け。

……大切な人、なんだろう？」

未だ躊躇し、下を向く陽介。 全く、どこまでも優しいやつだな。

「大丈夫だ。 必ず戻るからよ。」

ようやく上を向いた陽介は、

「ああ、お前を信じる。 近くの公園で待ってるから、必ず戻ってこいよ」

歪んだ空間へと走り出す。

このままいけば、ハッピーエンドというやつだろう。 だが、現実はそのはいかない。

「……早く出てこいよ。 隠れてんのはわかってんだからよ」

俺がそういうと、ぞろぞろと能力者たちが姿を現す。 そう、外で戦っている能力者達だ。

「どういうことだ？」

不知火が……まさか、遅かったのか！？

「外ではちゃんと戦ってるぜ。 俺達の幻影がな。」

……驚かしやがって。 能力か。

かなりの数の能力者達が集結していた。

……と百ほどか。

「さすがは魔王の子、といったところか。
でひるんでないとはな」

この人数を前にまる

首謀者と思われるその男が口を開く。

……マンガでいう、まさに悪役の顔立ちだ。

感動的なツンデレ？

……館前……

……一体、どれだけの敵を……いや、味方を斬っただろうか？
四方八方からくる攻撃を避けては斬り、避けては斬り……。

とうに二百は超えているだろう。おかしいのは気づいていた。
斬った瞬間に身体は燃え尽きるはずが、燃えはせず、傷口も治る。

……おそらくは能力だろう。暗黒騎士、元將軍ファン・リートム。
私が將軍になるときに、將軍職を降ろされた男。

昔から天草家の持つ地位、最高司令官の座を狙っていた男でもある。
……今回の鮮誘拐事件も、地位剥奪を狙ったことなのだろうか？
彼の能力は全て幻影。倒しても意味はない。だが、私はここで
戦う。その方が手助けになる。この能力を使っている者は、倒
せば倒すほどオーラが減っていく。まだ、オーラが尽きないとこ
ろをみると、中々の実力らしい。……さすがは元將軍クラスとい
ったところだろうか。

「……まずいわね。」

私も実力には自信がある。一対一での闘いでは負ける気がしない。

だが、唯一、弱点がある。……能力の威力が強すぎるのだ。

威力が高いということは、決断していいことばかりではない。

オーラの消費が高い。身体への負担が高い。地形を変えるほど

の威力のため、闘う場所も考えなくてはならない。
メリットもあれば、デメリットもある。……これが世の常だ。

「私も……ここまでかしらね。」

まあ、いいわ。愛する陽介のためなもの。少しは役に立てたで
しょ。

婚約……とはいっても、最初はお見合いから始まった。お互い、
知らないもの同士だった。家のための婚約だった。だが、それ
がなくとも私達は結婚したはず。互いを知り、助け合い、愛し合
った。

だから……私達は……

「……最後まで、一緒にいたかったわ。」

不知火は覚悟した。
が、

「……ま、これからはいつだって一緒にいてやるぞ。」

聞きたかった声がした。陽介の声が。

「……あんだ。」

「世話かけたな、京子。」

生きていた。声が聞けた。それだけで充分だった。押し殺し
ていた感情が、一気に込み上げてくる。

「陽介!!」

「おおう、京子ちゃん、デレ期かい？」

「ばか、ばか、バカっ!!」

「……泣くなよ、京子。俺はここにいるからさ。」

「泣いてなんかないわよっ!!」

抱き合う。互いが望んだ再会。だが、長くは抱き合えない。ここは戦場であり、二人もそれを理解する騎士だから。

「……あまり抱き合ってももられないわね。」

二人は離れる。

「切り替えがめちゃくちゃ早い。さすがはツンだねえ。京子ちゃん。」

「……あんだこの状況、解ってていつてるんでしょ。」

ここは戦場。スキを見せれば、誰だって死んでしまう。やがて、そこに清水も鮮も合流した。

「不知火先輩。お疲れ様です。」

「……もうちょっと、気遣いの言葉があるでしょうが。」

「京子さん。ホントにありがとうございます。」

「いいのよ、鮮。貴女は何もわるくないのだから。むしろ、悪いのは陽介だしね。」

「おいおい、手厳しいな、こりゃ。」

四人は構える。が、相手は闘うどころか、消えてしまった。

「……能力を解除したか、オーラが尽きたんだろうな。」

「遊さんが危ないのでは？ 急いで戻らなくて良いのですか？」

「……いや、あいつは心配ないだろ。むしろ、俺達が助けにいくほうが邪魔になる。俺達は早く脱出するぜ。」

感動的なツンデレ？（後書き）

皆さん、こんにちわ（＾o＾）

最近、編集が遅れていますが、ご勘弁を（TOT）ノ
そして嬉しいことに、……回が進むことに読者様が増えています。

今の目標としては、一日にユニーク100いくことです！！
100いったら……活動報告を更新します！！

また、この作品についての質問や、キャラクターに相談してみたい
こと、

例えば、

「白石先生……スリーサイズを！！」

とかでも……ってか、何でも大丈夫です。

常時、受け付けておりますのでよろしくです。

もちろん、アドバイスや指摘の方もよろしく願います。
これからもより一層、精進していきたいと思います。

それでは、本編について。

……陽介、かつこいいー！！

あれ？ こんなかつこよかつたつけ？

なんか、もっとギャグキャラだった気がするけどなあ。

そして、ファン。

このキャラも、名前あったつけ？って感じですよ。

……実は、かなりのオリジナルが。

もともと、ファンは名前なかったし、陽介のセリフも少なかったんですよね。

……精進したな、二人とも。おれもがんばらなくっちゃな!!

ちなみに、不知火のかわいさも、グリーンとパワーアップしています。

……キャラ投票は、不知火と陽介が上位に食い込みそうだなあ（<

―>）

意図

……ホール……

相手は百ほど……いや、相手の能力で二百ほどになった。陽介や、不知火達は無事逃げ切ることができたのだろうか？
もしそうなら、俺も今すぐ逃げ出したいところだが……今回はそうもいかない。

「よお、そのおのあんた。能力をこつちに回したってことは、外の連中は無事なのか？」

首謀者らしき男に問いかける。

「くくつ、まあな。奴らは足早に逃げて行つたみたいだぜ？」

不敵な笑みを浮かべ、答える。

……？ 何かおかしい。鮮を誘拐しておきながら、簡単に逃がす？ しかも上機嫌で。

「……お前の意図が解らない。軍の上位職に就きたいからこそ、誘拐を実行したんじゃないのか？
なぜ、その対象である陽介たちを簡単に逃がす？」

「ぶつ！！……はっはっは！！こりゃいい、傑作だ」

その場の者、すべてが大声で笑い出す。
なんだ？ついに頭おかしくなったのか？

「いや、失礼。ただ、何も知らないお前が傑作だったもんでな」

……？

「俺らの狙いは、あんな小物じゃねえ」

「俺らの狙いはただ一人」

「てめえだよ、立花 遊！！」

狙いは……俺？ 何故だ？ 俺は王位に就いてすらないし、何の得にもならないはずだ。

……いや、まて。狙いが陽介なら、わざわざ鮮を日本にまで誘拐してくることはない。

つまり、初めから狙いは俺であることは解った。そこはいい。だが、こいつらに。

「お前らに何の得がある？ このまま俺を殺したところで、悪魔側に戻ったとしても」

「まだわからねえのか？」

「俺らはあそこに戻るきはねえ」

「もう、俺らは天使側の人間なんだよ」

！？

……いや、驚くこともないか。これですべての話が繋がる。

「あのお方は、落ちこぼれだった俺らに生きる場所を与えてくれると約束してくれた。」

お前を殺すことだな!!

悪魔側じゃ、最早、天草家以外が最高司令の座に就くことなんてありえないからなあ。

昔からあの一族は気に入らなかつたんだが……まあ、あのお方は手を出すな、って言ってたしな。

見逃してやったってわけよ。」

続けて、ちがう男が、

「まあ、要は考えようだよなあ？　これ以上悪魔の名を語っていても未来がねえ。」

外にいる奴らを殺してもよかつたんだがな」

……。

俺はただ立ち尽くしていた。

男たちの話など聞かずに。

「おいっ魔王!!　てめっ、話聞いてんのかよ!!」

「……お前らさあ」

「ああ!?!」

「少しでも陽介の気持ち、考えたことあんのか?」

……。

「ぎゃっーはっはっはー。　なに、気持ちいいこと言ってたんだ?」

「てめーは？」

「んなもん、考えるわきゃねーだろ」

げらげらと汚い声で笑い出す糞野郎ども。

「そうか……すつきりした」

俺がいけないんだろうな。戻ったら謝らないと。俺のせいで皆に迷惑をかけちゃった。

「何言ってるんだてめー？」

けど、その前に、今は……

「まあ、この人数差だ。声も出ないほどに怯えてるんだろうな。」

この糞野郎どもを……。

「……俺あ、あんまりキレたりしないんだがよお……」

ぶっ殺せるんだからなあ……！！

「てめーらあはべつだあつっ！！俺の親友を傷つけた拳句、大切なものを踏みにじったんだからなあつっ……！！」

一喝……いや、その限度を超えていた。怒りはオーラへと変わり、館全体が揺れ、震度7ほどの地震が起きたように感じるほどだった。

「ひっ……！」

そして、その場にいる者はすべてが震え、遊の気迫に、気絶する者さえいた。

「……はっ、ははっ。いつ、今更そんなキレたところで、この人数差は埋められまい。」

確かに気迫はすげえさ。さすがは魔王の子、いや、化けものだ。だが、……周りにから見れば、明らかに圧倒的。なんせ、一対二百。圧倒的に俺らの有利だ、賭けにさえならない。ただ、もうひとつ圧倒的なものがあつたことに、俺らは気がつくことはできなかった。

「……確かに人数じゃ、勝ち目が無いなあ。多数決じゃ、そっちの勝ちだ。だが、闘い的にはどうみても俺が優勢だな」

「はっ。冗談も程々にしろよ。オーラの量をみたつて……！？」

オーラ量が桁違いということは、その場にいるものも理解していた。だが、違うにしても限界はある。どんな化け物であっても、最高でも、五十人くらいのオーラ量が限界だろう。

だが、こいつは……何もかもが違う。

こいつのオーラは……館全体を覆っている……だと！？

声にならない叫び声

一方、陽介たちは。

「皆さん、館がー!!」

「どうかしたの？ 鮮？ ！？ 館が……黒いオーラに……覆われている!?」

「これが……立花先輩の、魔王の力……」

「あの黒い刻印。……遊、やっぱりお前が……」

三人が驚きを隠せずに、館を見つめる中、陽介だけが館を見て、何かを思いつめていた。

館・ホール

いつもと違うオーラを纏いながら、ユウは200人もの能力者を前に立ち尽くし、笑っていた。殺気とも、愉しさとも違う感情を抱えながら。

「な、何笑ってやがんだよ」

「いや、さっきはよお、許せないくらい殺してえって気持ちだったんだがなあ……!!」

「だんだん、楽しくなってきたよ……!!」

「またも、一喝の限度を超えた衝撃を放つユウ。その衝撃が及ぼす影響は、先ほどのものより性質が悪く、血反吐を吐くものや、心臓を停止させる者さえいた。」

「いやだ、闘いたくねえ」

「ほんとに殺されちまう」

「人なのかよ、あいつは」

その場は明らかに、いや、完全にユウの圧倒的有利となった。

「どうだあ？ 完璧に、お前らは不利になっちまったぜえ？」

「ちっ！！ だからどうした!？」

「へえ、いいねえ。強気じゃあねえかあ。いいよ、もっとさあ」

ユウの眼は赤く光り、ディバインレリックの記号（ の45度回転）が刻み込まれる。

そして、黒い刻印は右腕にまでとどまらず、ユウの顔にまで伸びた。

「愉しませてくれやあああ！！」

「俺は死にたくねえ！！」

「俺たちじゃないっこねえ！！」

「助けてくれ！！」

ユウの叫びは、敵の戦意を殺ぎ落とし、混乱を招いた。
が、敵のリーダー格の男は違った。

「おめえら！！落ち着け！！　生き延びたいなら闘うしかねえんだ！！」

「やるじゃねえか。　部隊をまとめあげる。　リーダーの鏡だあ。
まあ、このままじゃつまらねえしなあ」

「俺だって元・將軍だ」

リーダーの男は続ける

「俺は元・暗黒騎士団將軍、ファン・リートム。　おめえみてえ
なガキには負けねえ！！」

「負けねえ、か。　確かに、愉快とは言ったが……何か勘違い
してるみてえだな。

俺はこれからお前らと闘うわけじゃねえ」

瞬間、その場、全ての者は凍りつく。
遊の言葉によって。

「俺がこれからするのは……」

ただの……

大量虐殺だよ！！！！！！！！」

そして遊は笑い出す。それは最早、人間としての笑い声とは呼べなく。

全ての者が恐怖する、悪魔の笑い声として。

「うわー！ー！！化け物だあー！ー！！！！！！」

「ばっ、化け物がー！ー！！！！」

「こっちに来るんじゃないやねえ！！！！化け物！！ 死んじまえー！！！！」

ズキツツツ！！！！！！

なんだ？ 今、ものすごい衝撃が頭に……。

「（死んじゃえ。化け物なんか）」

「（なんでお前みたいな化け物が学校にいるんだよ）」

「（誰だよ、こんな化け物造った奴）」

やめろ！！　なんだ！？　この声は！！　頭に直接入ってくる！！

痛い！！

頭が痛い！！！！

「グツツ、ああああああああああっっっ！！！！！！！！！！」

声にならない叫び声（後書き）

……（TOT）／

なんで泣いてるかって？
そんなの

書き直しを食らったからに決まってるじゃないですかあ！！

いや、すいません。

実はさっき、いいのが書いてあげようと思ったんですが。

……エラー発生。

……は？

結果。

いい作品の劣化版誕生！！
つまりこの回。

……かなりシヨックです。

いいものが書けていたことだけに。

でも、大体は再現できているかと。

まあ、この次に期待ということ。

皆さん、これからもよろしく願います

……愚痴みたいになってすいません（<―>）

勝利者の姿

「ぐっっ!! あああっ!!」

頭に……声が。それに同調するかのように頭が……。

あまりの痛みに、俺は地面に膝をついてしまう。

「なっ、なんだ？ いきなり崩れ落ちたぞ？」

「おい、今ならいけるんじゃないか？」

「野郎ども！ 構えろ!!」

その号令によって、今まで混乱していた兵士たちは落ち着きを取り戻し、士気が上がる。

そして、各々の能力を発動させるための、戦闘態勢に入る。

「（立って、遊）」

まただ。頭に声が。だが、さっきまでとは違う。誰なんだ？

「（僕が誰なのか、今やるべきことはそんなことじゃないはずだ。今すべきこと、君ならわかるだろう？）」

今やるべきこと……。ああ、わかっているぞ。俺がすべきことは……。

「（頑張って。君ならできる。僕にできることはまだ限られて

いるけど、少しなら協力できるから。」

こいつらを殺すことだ。

「……………くっ。あつはつはつは。ビビらせやがって。なんだかしらねえが、頭がおかしくなっちまったみてえだな。今のうちに死ねや!」

頭の痛みが引区と同時に立ちあがり、相手を睨みつける。

四方八方、数えきれない程の攻撃が、俺を取り囲む。能力は解らなかつた。なにせ、数えきれない程の能力数。ただ、攻撃は遅かつた。相手が未熟だからということではなく、

ただ単に、俺の力が、ディバインレリックの力が増しているからだろう。

ディバインレリックだけのおかげではない気もするが……。

「……遅い。」

全ての攻撃を上へと弾く。無論、天井は崩れ落ちる。

うあああああつ!という、悲鳴がいくつも聞こえた。そこは一瞬で、リッチなホールではなく、光り無き絶望の地獄と化した。

「これだ。……………ここが、てめえらの墓場と化す。」

「うつ……………うわああああ」

何人もの能力者が逃げ出そうとする。が、逃げ場は瓦礫に阻まれ、

逃げ出すことはできない。

「……大丈夫だ。俺もそこまで非道じゃない。……一瞬で、跡形もなく消してやるよ。」

右手を上へと掲げる。と同時に、右腕と顔の右目あたりまで支配していた刻印が、右腕を黒く染め上げていく。

「……終いだ。死ね。」

その瞳には、普段のようなやる気のない瞳ではなく、……ただ、殺すことを愉しむかのような瞳だった。

ユウの手が黒く染まった瞬間、館、全てが、跡形もなく潰れていた。

……ホールであった場所は、ただただ、真っ赤に染まっていた。

「うっ、うっ」

魔王によって、館、仲間全てが消し去られた。

だが俺は、能力によって生み出した、傀儡兵士バベットソルジャーを盾にすることによって生きながらえていた。

だが、いくら生きながらえているとは言っても、あと数分の命。それくらい、俺も悟っている。

それほどの威力だったのだ、奴の攻撃は。

「（……詮、俺も、ファン・リートムもここで死ぬのか）」

最後に一目と、館跡につつまっている魔王の後姿を見た。
そして、一目で悟った。

自分は負けるべくして、負けたのだと。

その後ろ姿で悟ったものとは。

風に揺れる長い髪、跡地を見つめる紅い瞳、そして何より、深い悲しみを思わせる表情。

「……これほど、気持ちのいい気分は初めてだ。……初めて、素直に負けを認めることができた。」

やがて、彼は命を引き取った。清々しい顔で。

だが、ひとつ不思議に思ったことがあったという。

遊の髪が長く、白髪と黒髪に分かれていたということが。

兄に似つかない妹

館近くの公園

遊を待つ陽介たちは公園から動けずにいた。

「今、館から凄い爆発音が。行かなくていいんですか 兄さん」

館方面から聞こえた、巨大な音に反応する鮮

「……。大丈夫だろう。遊が今まで、約束を破ったことはない。それに……」

冷静な口調で答える陽介。その言動には確かな自信さえ感じられた。

「それに？」

「あの腕」

「？ 腕？」

「……いや、なんでもない。」

何かをつぶやいた陽介だが、はっきりとは話そうとはしなかった。

「しかし、このままここにいても埒が明かないのでは？」

鮮を後押しするかのようには清水は言う。

「怜香。　そうですね、このままじゃ埒が明きませんよ」

「だけど、今うごいても、立花の邪魔になるでしょうね。」

だが不知火は、否定を示す。

「そんな、京子さんまで……」

「私だつて立花が心配ないわけじゃない。　けれど、だからといって立花を助けに行く？」

仮に立花を助けに行つたとして、立花を助けたとしましょう。

「だけど、あなたが捕まつたとしたら？　可能性はゼロじゃないでしょう？」

あくまでも私たちの目的は鮮、および陽介の救出、護衛。

私の言いたいこと、鮮……解るわよね？」

鮮は不知火の言葉を理解したのか、自分の無力さを感じ、うつむいてしまう。

「（確かに、鮮や怜香の考えはもつともだ。　俺だつて当然、遊が心配だ。　だが、今は遊を信じるしかない。　もし、今助けにいつても、もう一度、鮮が捕まりでもしたら、それこそ最悪の状況だしな。　それに今の俺はリーダーなんだ。　あのとときの俺とは違う。　迅速に、的確に、判断しなきゃいけないんだ！　……たとえそれがどんな未来を招こうとも）」

鮮に続き陽介まで下を向いてしまい、しばらくの沈黙が続く。

……。

「仕方ない、助けに」

「その必要はねえぞ。」

陽介が切り出したとき、公園の入口から聞き慣れた声があった。

「遊!!」

陽介は、館から戻った俺に抱き着こうとするが、

「おれにその気はねえ。」

と、華麗に避け、陽介はそのまま道の壁に突っ込んだ。壁に頭が食い込んでしまった陽介は、一人で、ウゴゴゴっ、と唸っていた。

「（すごいなあいつ。頭からコンクリの壁にモロに突っ込んだのに、まだ意識があるのか）」

俺は、陽介の耐久力に感心しつつ、清水達に向き合った。

「……全員、無事か？」

「ええ。あなたのおかげでね。」

よかった。全員無事で。不知火も、オーラがへってるが、大きな怪我はしてないみたいだしな。

「遊さん、ホントにありがとうございます。」

茶髪ロングで清楚さ抜群の少女が俺にぺこっ、と一礼してくる。

この娘が陽介の妹か。

……似てねえ、見れば見るほど似てねえよ。 どうすれば兄貴と妹でここまで違いが浮き彫りになっちまうんだ!?

だってこの娘の兄貴は、あそこで壁に頭突っ込んで、足をじたばたさせて、下ネタ連発して、二次元の話ばっかして女子に引かれてるダメ兄貴なんだぜ!?

……ってか、陽介。 妹の前でアホ丸出しじゃねえか。

対して妹さんと言えば、茶髪でサラサラの髪の毛を靡かせて、顔もコンパクトで、スタイル抜群で、胸だって…… 不知火や清水に劣らないくらいだし。

「あの……遊さん。 そんなに見つめられると、私……」

どうやら、妹さんの体を観察していたのがばれてしまったようだ。

……ってか、何やってんだ? 俺は。 変態じゃねえか。

「ああ、わるい。 別にそんなつもりはなか」

「……立花先輩?」

「……立花?」

いつの間にか、俺の後ろには相性最悪の不知火と清水が立っていて、俺の首の左右に刀とグランオルグが突きたてられていた。

「すみませんほんとにごめんなさいその気はなかったんですけどです信じてください冤罪です。」

「ってか、二人とも笑顔が怖いんだけど!? 笑ってないよね!? 心が笑ってないよね!?!」

「やばい殺される。」

「もうすでに首の皮切れてるんだけど!?!」

「全身から冷汗があふれ出てくる。」

「「ちっ」「」

二人はそれぞれの武器をしまい、揃えて舌打ちする。

「かなり息合ってるんだが。相性悪いの嘘だよな?」

「しかも舌打ちって。なんなの?」

「「……遊さんになら……見られてもいいのに……」」

「ん?」

「いえいえ!! 何でもないです!!」

顔を真っ赤にし、あわてて答える妹さん。

「? 声が小さくてよく聞こえなかったんだが。」

「なんて言っただろうな。」

「それより遊さん。前に私とお会いしたことありませんよね?」

「不意にそんなことを質問される。」

「妹さんと? 俺が?」

……。

「いや、初対面のはずだが？」

「そう……ですよね」

何かが気にかかっている妹さん。

んー、かといって、妹さんとは初めて会うはずだしな。 こんなに可愛い子なんだ。 忘れるわけではない。

「ん？」

……こええよ、あの二人。

俺の心でも読めるって言うのか？
未だに冷汗が引かない遊だった。

兄に似つかない妹（後書き）

フラグビンビンの遊。

うらやましい！！ おれにもよこせえっ！！

……空しくなってくるので、この辺でやめときます（TOT）ノ

さて、今回のお話ですが……何と重大発表が！！
実は鮮が……

サブキャラからメインへ！！

おめでとう） ^o^（

いや、本当ならこのお話だけしか登場しない鮮でしたが、
こんな可愛い子を使わずしてどうする！！

ということで、これから活躍していただくかと。

……まあ、活躍と言っても、後半の方ですが。

ではこの辺で（^・^）

追記

遊が館で鮮と会っているのに、この場面で「この娘が」というのは、
間違いではありません。

仕様です。

終わりが指し示すもの

「……まあ、なにはともあれ、一件落着だな。……妹さんはこれからどうすんだ？」

一度は誘拐されたのだ。まさか、暗黒騎士側に戻るわけにもいかないだろうし、このまま日本に留まっても駄目だろうし。

「私は……」

鮮は、返答に困ったのか、陽介のほうをみる。陽介はいつの間にか、壁から抜け出し、悠々と不知火の隣にたっていた。ってか、いつの間に壁から脱出したんだ？

「俺と鮮と京子は、革命軍の本部に戻る。書類整理やら、作戦会議やらで忙しくなっちゃってな。」

本部？　まあ、暗黒騎士の革命軍というくらいだ。南北アメリカ大陸のどこかにあるはずだが……。

そういえば、陽介たちは戦力増強のために日本に来てたんだっただな。

「そういや、遊。おまえも革命軍の一員になったんだよな？」

「ん？　ああ、まあ本日付でな」

陽介は少し悩んで、よし、と何かをひらめいたように手をたたく。

「んじゃ、遊と冷香にはここに残ってもらって引き続き、戦力の増強、及び戦闘態勢を怠るな。いつ、作戦決行の合図がかかってもいいようにな」

陽介はやさしくにつこりと俺たちに微笑みかける。

……優しいやつだ。ノルマも出してない上に、戦闘準備を怠るな、か。

要は、体を休めろ、って言うてるようなもんだろ？

それでいて自分は仕事、仕事の毎日か。……こいつらしいな。

「了解です」

「わかった」

俺と清水が頷く。

俺がこいつにしてやれることはそれくらいか。

……友として、それはどうなんだろうな。

「まあ、ここにいても仕方ないしね。行動を起こすときは、貴方達にも声をかけるわよ。」

不知火がカプセルのようなものを先ほど、陽介が頭を突っ込んだ場所に投げると、壁に穴が開いていた場所に人一人通れそうな扉ゲートが出現する。

「なにも、俺が頭から突っ込んだ場所に出現させなくても良かったでしょ！？ 京子ちゃん」

「しるねえ」

痴話げんかが始まる。　　こういう風景を見ると、二人が婚約者なのだなという実感がわく。

……いまだに信じきれない点多いけどな。

それにしても、あの扉、何かの本が教材で見たことがある。

フライトゲート。

扉を潜り抜けることで、所定位置（自らでその位置の座標に行き、カプセルに座標を組み込むことでその場所を登録できる）にワープできるといった、とても優れている発明品である。

だが、優秀すぎるため大量生産ができず、今では世界で二つしかない、大人数での移動ができないのが欠陥であると、本には書かれていた。

しかし……こいつらが所持していたのか……なんか、革命軍つてのを実感できた瞬間だ。

「……できれば、あんまり声をかけてもらいたくはないんだがな」

「相変わらずやる気のない男ね。

まあ、いいわ。

それじゃあね」

不知火はそういって、扉の中へ消えた。

「遊さん。今度、もし宜しければ、家に来て下さい。」

これ以上にないくらいの笑顔を浮かべる妹さん。

これで落ちない男はそうはいないんじゃないか？

「ああ、そんなときはよろしく頼むな。　　うまいもんとか食わせてく

れ

「ハイ」

「それと」

陽介には聞こえないように、妹さんに近づいて小声でしゃべる。

「陽介のこと、よろしくな」

「任せてください」

自信満々に胸をポンとたたき、鮮も不知火に続き扉をくぐった。

……。

「遊」

扉と陽介に挟まれた位置で、俺は陽介の声を聞いた。

その声はどこか悲しげで、別れを惜しむようだった。

……当たり前だよな、俺だって悲しいんだから。

「ああ。またな。 あんま、こういう別れとか、得意じゃねえから

……言いにくいが……」

陽介は俺と向かい合ったまま、立ち尽くし、話を聞いていた。

「……陽介、俺はいつでも、お前の親友だ。 例え、仲間が犠牲になつたとしても、周りの人間が否定しようとも、お前が正しいと思つたことをしる。」

それが正義なんだ

俺はそれについていくからよ。」

……俺はそういうと、陽介は何かをかみしめるように、

「ああ」

と、頷いた。

陽介は一步ずつ俺に近づき、いや違うな。一步づつ、扉へと向かう。

そして、俺の前を通過するときに

「遊、身体に気をつけてな」

と。

……おせっかいな野郎だ。何か意味深だったが……特に意味はなく、そのままの意味なんだろうな。

ちょうど、陽介が扉に入ろうかというあたりで俺は口を開く。

「陽介」

俺が口を開くと、陽介は歩みを止め、俺に背をむけたまま話を聞いた。

「さっきは別れとか言っちゃったが、そうじゃないんだろうなあ、これは。」

これは、お前と俺の平穏な日常の終わりだ。それに違いはねえ。だが、終わりが指し示すものは別れや破滅じゃねえ。

終わりが指し示すもんは、始まりってやつだ。

つまり、これはお前が突き進む正義ってやつがようやく始まったっ

て意味なんじゃねえか？」

「!?!? 遊、お前……」

何かに気付き、一度は振り向き、遊の姿を確認した陽介だが、すぐに扉の方に向き直り扉をくぐって行ってしまふ。

そのときしか浮かびあがっていなかった、遊の右腕の紋章だけを確認して。

……。

「さてと、んじゃ帰るかな。」

その場には、俺と清水だけが残されていた。

「あの、立花先輩。」

「……ん？ どうした？ ……あと、俺のことは遊でいいぞ。」

「それじゃ、立花先輩。」

……スルーかよ。

しかも、表情一つ変えやがらねえ。

「あの……ありがとうございました。貴方のおかげで、皆無事に」

これにはびっくり。

さっきまでは冷静沉着で表情一つ変えやがらない清水がここにきて俺に頭を下げるか。

……だが、俺はその言葉を制するように言う。

「あー、別に俺は何もしてないぞ。むしろ、逃げ回ってたしな。それに、俺よりも必死に闘ってた不知火や、妹さんを助けた清水の方が評価されるべきだと思うけどな。」

「ですが」

何か納得いつていないような清水。

何でそんなに意地を張っているのだろうか。

「それに、その話は今更だしな。皆無事。それでいいじゃねえか。」

……そう。それでいいんだ。皆、無事だった。それだけで十分だ。

「……んまあ、そういうことだ。んじゃ、今日はもう遅いし、俺、帰るわ。また明日な。」

「えっ!?!? あの」

清水の返事も聞かず、俺はさっさと帰ってしまつ。今日はなにかと疲れたな。

早く寝るとしよう。

奨学金と書き、せいかつひ、と読む

「はあゝ。 ようやく帰ってきたか」

公園から帰路についてから1時間半、道が分からずに自分の勘だけを頼りに歩き、ようやく家に着いたというわけだ。

おかげでもう歩けねえし、体は戦いの方でスタボロだし、心はもう……折れそうだ。

決めた。 ぜってえ今日はめっちゃ寝てやる。

もう、明日は起きねえぞ。 せつかくの休日なんだ、一日中寝てやる。

……ん？ そういや、清水にまた明日、っていつちまったが休日だったな。

まあ、いいか。

そんなことを思いながら、俺は家のドアを開ける。

「お帰りなさいませ〜、ご主人様〜」

……。

あるものに目を奪われ、俺は身動きができなくなる。
メイド服を着たマヤの姿に目を奪われ。

「……家を間違えました、すみません」

「ちよつと〜!! ちがいますよ〜!!? あってます!! ーこはあなたの家です〜!!」

そういつて、外に出ようとする俺の腕を引き止めるマヤ。つてか、前にもこんなことあったよな(汗)

「それで、お前は何やってんだよ？」

いつもなら黒いマントだけ羽織って、宙に浮いてるのに。

……なぜかシンプルな白と黒のメイド服を着ている。

「疲れたお体を癒そうと思ってます。」

日本の文化では、この格好で、ご主人様、と言えば見たものに所謂、萌え、という癒しを与えられると聞きましたので。」

いやいやいや、どういうことだよ！？」

確かに間違っちゃいねえけど、そんな感情を抱くのは一部の人間だけだぞ？

例えば、陽介だろ？　あとは……陽介とか？

……陽介……お前ってやつは……。

いや、俺は違うぞ！？　断じて違うぞ！？

つてか、そんなことはどうでもいいんだよ！？

大体、こいつどっからそんな情報仕入れてきやがったんだ？

……ん！？　まさか！？

「おい、マヤ！！　お前、まさか一日中テレビ見てたんじゃ……」

「？　当然じゃないですか。他にこの家でやることあるんですか？」

……最悪だ、コイツ。　　なんて事してくれたんだ。

「？　何かいけませんでしたか？」

頭の上からハテナマークが表示されていそうな顔で俺に質問してくる。

……はあ。

「……俺が貧乏っていうことは知ってるよな？」

呆れたように、俺はマヤの問いに答えていく。

「ええ。　だから食費、お風呂の水、水道水の使い方、その他もろもろをケチくさく抑えていますよね？」

……せめて節約していると言って欲しい。

仕方ないのだ。

俺には仕送りがなく、学校から送られてくる……というかなんといつか、奨学金のようなものだけで生活費をやりくりしている現状なのだ。

普段は何故、特待生なのかと疑心暗鬼なのが、こういう時ばかりは自信満々に胸を張って、俺が特待生だ、と言ってやりたいほどである。

生活費全てを賄ってもらっている立場なのだから。

……こう考えると、俺って情けないなあ……。

ん？　バイトすればいいって？

……めんどくさいだろ？

「よく解ってんじやないか。
その物わかりのいいマヤさんが何故、電気を使いたい放題やっちゃ
つてくれてるのかな？」

「……………電気ってお金かかるんですか？」

……………は？

「ちよつと待て！？ お前そんなことも知らねえのか！？」

んなこと一般常識だろ？

小学生はもちろん、下手したら3歳のガキですら知ってることだぞ
！？

「私、今まで王宮で仕えていました〜。

王宮の電気は、能力者が供給してましたので〜」

……………コイツが魔王の使い魔てのを忘れてたぜ。

知らないことは罪、だとよく言われるが、叱るとなるとそれも別問
題だよな。

俺には怒ることが出来なさそうだ。

……………柄でもねえしな。

「……………はあ〜、解った。

今度からは気を付けてくれ」

少々困り顔であったマヤだが、何かを思いついたようで、顔が一気
に明るくなり、笑顔で、

「すみません、ご主人様。
お詫びに、私がご奉仕させていただきます。
ご飯にしますか？ お風呂にしますか？
それとも、わ・た・た・」

「だから、それはもういいんだよ！！」

こうして、長く、そして騒がしい一日は幕を閉じようとしていた。
……今日はいいこと、ひとつもなかったな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3445t/>

Eternal wish 序章：始まりのようで、終わりのようで

2011年9月10日22時52分発行